
心の隙間の埋め方

篠原 皐月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心の隙間の埋め方

【Nコード】

N9168W

【作者名】

篠原 皐月

【あらすじ】

佐竹清香は早くに両親を亡くし、シスコン気味の売れっ子作家の兄清人と2人暮らし。若干寂しくも穏やかな毎日を送っていたが、20歳の誕生日を過ぎる頃から、身边が賑やかになってくる。それが両親の通夜の席で不用意に発した一言と、彼女達両親の隠された境遇に因るものだとは、清香は夢にも思っていなかった。

顔見知りの優しい《お兄さん》達に加え、近付いてくる1人の人物を無視できなくなっていく清香。しかしその相手も複雑な事情を抱えて清香に接触していたのだった。

プロローグ

両親の通夜で、市営住宅の集会所に設けられた白を基調とした簡素な祭壇を見やりながら、その間近に制服姿で正座していた清香は呆然と今の状況について考えていた。

(どうしてこんな事になってるの？ 昨日までは2人とも、普通に笑ってくれてたのに……)

中段に並べて飾られている両親の遺影を見ても、居眠り運転のトラップに突っ込まれて両親が呆気なくこの世を去ってしまった事が未だに理解できていない清香を、隣に座る喪主の年の離れた兄、清人が低い声で促す。

「清香、ご挨拶しなさい」

その声で正面に向き直ると、旧知の人物が顔を揃えて弔問にやって来ていた。

「柏木さん、倉田さん、松原さん。本日はお忙しいところ足を運んで頂き、ありがとうございます」

清人礼儀正しくが頭を下げる前で、並んで沈痛な面持ちを見せる父親の幼馴染として時折顔を見せていた初老の男性達が口々に声をかける。

「何を言ってるんだね、水臭いぞ清人君」

「そうだぞ？しかし連絡を受けて、何か我々でできる事があればと思つて取り急ぎ駆けつけてみたが、この短時間で君が万事整えていた様で安心したな」

「私達としては寂しいが、2人とも安心しているだろう」

「いえ、この自治会の方やご近所の方にお世話して頂きました。

私1人ではとても……。今後何か手に余る事がありましたら、その

時はご助力をお願いします」

再度神妙に頭を下げた清人に対し、三人は涙ぐみながらも力強く請け負った。

「それは勿論だとも。遠慮なんかしないで、幾らでも頼って来なさい」

「まだ清香ちゃんも中学に上がったばかりなんだしな。あまり気を落とすんじゃないよ？」

「何か困った事があつたら、すぐにおじさん達に言うんだよ？」

引き続き自分にかけられた声が引き金になったのか、ここにきて漸く清香の目にじんわりと涙が浮かんでくる。

「雄一郎おじさん、正彦おじさん、義則おじさん、ありがとう、ごさいま、す……」

そんな清香の様子を見た面々は、黙って1人は頭を撫で、1人は軽く肩を叩き、1人は膝の上で固く握りしめた彼女の手を優しく握ってから下がって行った。そして彼らが集会場の片隅で、何やら手伝いの女性達と話し始めたのを涙で潤んだ視界に留めていると、突然横の清人が立ち上がったのに驚く。

「どうしたの？ お兄ちゃん」

すると清人は険しい顔つきで低く囁いてから、出入り口に向かって足早に歩き出した。

「ちよつとだけ離れる。ここを頼む」

「え！？ ちよつと！ お兄ちゃん!？」

1人にされ一気に心細くなったものの、同じ団地の知り合いが挨拶に来た為自分まで席を立つ真似はできず、そのまま座ってお礼を言いながら頭を下げた。そしてその人物が去ると同時に、同じ棟で家族ぐるみの付き合いをしていた女性が、割烹着姿で背後からにじり寄って声をかける。

「清香ちゃん、ちょっと良い？」

「はい、なんででしょうか」

するとその女性は割烹着のポケットから素早く白い封筒を取り出し、後ろに向き直った清香の手に握らせた。

「凄い仕立ての良いスーツを来た三人の方に、『葬儀では現金が手元に無いと何かと不自由です。私達からだと言人君は遠慮して受け取らないと思いますので、貴方達から後で渡して頂けませんか？』って押し切られて預かっちゃったんだけど……」

困った様に囁かれ、こっそり渡された封筒の厚みに彼らの思いやりを実感して、清香はいよいよ号泣しそうになる。

「ありがとうございます。あとからお兄ちゃんに渡して、おじさん達にはお礼をちゃんと言いますから」

それを聞いて、相手は如何にも安堵した表情を見せた。

「良かったわ。おばさん安心しちゃった。だって佐竹さんの所ってご夫婦どちらも親戚付き合いが無いって伺ってたから、急に兄妹2人だけになってしまって団地の皆で心配してたのよ。勿論清人君はもう成人して自活してるから大丈夫だとは思うけど、やっぱり頼りになる親戚の方が居れば安心でしょう？ 優しい伯父さん達で良かったわね」

「……いえ、あの方達は父の幼馴染で仲良くして頂いただけで、親戚じゃないんです」

「え？ あ、そう、だったの？」

「父は確かに天涯孤独ですが、確かに母には親兄弟が居るらしいです」

「らしいですって……。清香ちゃん？ その人達に連絡は取ったの？ それらしい方はまだお見えになっていないみたいだけど……」

何故か急に俯き、暗い声で呻くように告げた清香に、若干たじろぎながらも相手は控え目に問い質したが、そこでいきなり清香が激昂した。

「だれが連絡なんか取るか！ あの人で無し野郎どもにつ！！」
その怒声に集会場内が静まりかえり、先程挨拶して帰りかけていた三人組と、それと入れ替わりに目立たぬ様に集会場に入ろうとしていた1人の老人の動きが止まった。

「おばさん！」

「なっ、何っ！？ 清香ちゃんっ！」

「母の家族っていう人達はね、お金持ち特有のもの凄く選民意識に凝り固まったどうしようもない連中で、1人娘の結婚しようとする相手が15も年上のバツ子持ちの男だと知るや、その職場に圧力掛けて首にさせ、借りてたアパートの大家に金を掴ませて無理やりたちのかせ、人を雇って悪質なデマビラを撒き散らして子供が学校でいじめられる様にしむけ、何度電話番号をかけても無言電話を掛けまくる、非常識かつ不見識な人間の集団なの！ お母さんから洗いざらい聞いてるんだから！」

「そ、それはなかなか、大変だったのねえ……」

思わずドン引きになりながらも相槌を打った相手に、清香は泣き叫びながら畳み掛ける。

「お父さんは間違っても人の悪口なんか言わない人だったから、その話を聞いている横で『子供に向かってそんな事を言うのは止めなさい。それにそれだけ大事な1人娘を奪ったんだから、当然の仕打ちだと思ってるから』って笑ってたけど、お母さんは未だに怒ってたんだから。結婚の許しを得ようとお父さんがお兄ちゃんを連れて自分の実家に挨拶に行った時、よってたかっってお父さんをボコボコにした拳げ句、お兄ちゃんの腕まで折った事！」

「ええ？ そんな事があったの？」

「全然知らなかったわ」

「その頃清人君、小学生でしよう？」

「幾らなんでもそれは、子供相手に酷過ぎるわよね」

奥まった給湯室でお茶出しをしていた他の女性達も騒ぎに驚き出てきたが、清香の話を聞いて揃って顔を顰めつつ同意を示す。その声に重なる様に、清香が声を振り絞る様にして叫んだ。

「そんな人達、焼香に来たって一歩たりとも上げさせるもんですか！！ どうせ『それみた事か、こんな貧乏暮らしの上早死にするなんて馬鹿な奴だ』とかなんとか、せせら笑う為に来るに決まってるんだから！ もし来たら頭から灰をかぶらせて叩きだしてやるわっ！！」

「清香！ 何を騒いでる！？」

「お兄ちゃん！」

その時、どこに姿を消していたのか慌てて集会室に入って来た清人が清香に駆け寄ると、とうとう緊張の糸が切れたらしい清香が抱きついて盛大に泣き出した。

その自分の腕の中にすっぽりと埋まる小さな体を抱きかかえ、背中をさすってやりながら、先程断片的に聞こえてきた清香の叫びの影響を考え、清人は小さく溜息を吐いた。そして部屋に駆け込む時にすれ違った何人かの人間に、肩越しに視線を向ける。

案の定全員が未だ蠟人形の様な表情で固まっており、その者達にほんの僅かの罪悪感を覚えた清人は、謝罪の気持ちを視線に乗せ、清香を抱きかかえたままごく軽く頭を下げてみせたのだった。

プロローグ（後書き）

出だしがシリアスですが、頭の中で構築中の中身は基本コメディです。期待ハズレな展開になってしまったら、申し訳ありません。

第1話 二十歳の誕生日

2人で食べる為用意されたごく小さなサイズのホールケーキに、細いカラフルな蝋燭を20本立てた清人は、それに火を点けてから室内の電気を消した。そしてテーブルに戻り、向かい合って座っている妹を促す。

「さあ、吹き消してごらん、清香」

「はあ〜い」

途端に真顔になって何回か深呼吸して息を整えた清香は、勢い良く溜めた息を吐き出す。それは見事に一息で、全ての蝋燭の火を吹き消す事に成功した。

「誕生日おめでとう、清香」

「ありがとう、お兄ちゃん」

「さあ食べよう。今日はいつにも増して、腕によりをかけて準備したから」

「うん！」

途端に満面の笑みになり、ウキウキと料理に手を伸ばす清香。

当初清人に負担が大きかった兄妹2人暮らしも、八年近く経過した今ではきちんと清香も家事を分担していた。しかし小さな洋食レストランを経営していた亡父の料理の才能は主に息子に受け継がれたらしく、清香の料理はどうしても兄の作るそれに及ばないと自覚しているのだった。

「うう〜ん、やっぱりお兄ちゃんの料理は最高に美味しい！ 同じレシピで作っても、どうしてかお兄ちゃんの作った方が美味しくなるのよね。それにマンネリ化しないで次々レパートリーを増やしてるし」

幾つもの皿に手を伸ばして味わう合間に清香が感嘆の声を漏らす

と、清人が箸の動きを止めないまま爽やかに言い返す。

「それは当然だな」

「え？ どうして？ 何かお父さん直伝のコツでもあるなら教えて？」

途端にキラキラとした目を向けてくる妹に、清人は優しく目元を緩ませながらのたまった。

「大した事では無いけど、それは俺が作る料理には清香への愛が詰まってるから。清香が美味しく食べてくれたら嬉しいと、終始思いながら調理してるからな」

目鼻立ちがすつきりとした色白の、若干癖のある髪を綺麗に流して切り揃えている、一見王子系のイケメンに面と向かって言われたら動揺しない女性は少ないと思われるのだが、その手の台詞に慣れきっている妹は盛大に不満の意を唱える。

「ええ？ それは絶対納得できない！」

「どうして？」

「だって私だって料理する時は、毎回お兄ちゃんに美味しく食べて貰える様に愛情込めて作ってるのよ？ それなのにお兄ちゃんの作った料理には、適わないんだもの……。何か根本的な才能が欠けているとしか思えなくなっちゃう……」

最後は拗ねた様に呟いた妹の可愛らしい台詞に、清人は噴き出したいのを何とか堪えつつ宥めようと試みた。

「清香の愛は充分分かってるよ？ だけどそれが普段だだ漏れしてるから、料理だけに集中してないだけなんだろう。適性というより性格の問題だから心配するな。清香の料理は充分美味しいぞ？ 俺が保証する」

「ありがとう、お兄ちゃん」

この兄妹の日常を知っている彼女の友人達が聞いたなら「いい加減にしなさいよ、このバカカップル兄妹！」と盛大に毒吐かれる事は

確實だったが、自宅には当然2人しか存在しない為、そんなベタベタ会話が暫く続いた。

そして清人がふと思い出した様に口を開く。

「そういえば……、柏木さん達からお前への誕生日プレゼントを預かってるんだ」

「え？ 本当？」

嬉しそうに見返してくる清香に、自然と清人の顔が緩む。

「ああ、二十歳になった時に真珠を贈られると幸せになれるという謂われがあるそうで、3人で相談して色とかも揃えたらしい。柏木さんがネックレス、倉田さんがイヤリング、松原さんがブローチだそう。後でちゃんと礼状を書くんだぞ？」

「分かってるわ！ うわ、なんか凄く嬉しい！ いけ好かなくて音沙汰が無い親戚より、おじさん達の方がよっぽど本当の親戚らしいわね。『遠くの親戚より近くの他人』って良く言ったものだわ。ねえ、そう思わない？」

「……………ああ、そうかもな」

同意を求められた清人は何故か微妙に清香から視線を逸らし、幾分口ごもって控え目な同意を返した。しかし上機嫌な清香は、兄の不審な行動に気がつく事無く食べ続けたのだった。

佐竹家の兄妹がそんな風に和やかに誕生日ディナーを堪能している頃、清香に《親戚の様なおじさん達》と評されていた面々は、それぞれの息子達を連れ、とある場所で一堂に会していた。

「さて……、食事も無事済んだし、本題に入るか」

そう言っつてその場を取り仕切る発言をしたのは、その家の当主である柏木総一郎。

既に80近い年齢にも関わらず意気軒昂であり、大企業である柏木産業を一代で築き上げた往時の面影を失ってはいない人物であっ

た。

長方形の広い食堂に相応しい、20人は席に着けるダイニングテーブルの上座に当たる一辺に1人で陣取り、左右に並ぶ息子と孫息子達を睥睨した途端、食事中も和やかと言い難かった雰囲気が一層重苦しいものとなる。

「……お父さん。大体予想はつきませんが、息子達まで呼びつけた訳を説明して下さい」

柏木産業の社長職を引き継ぎ、最近では父親以上の手腕を発揮している財界では評判の彼の長男の雄一郎が深い溜め息を吐きつつ促すと、総一郎は重々しく言い出した。

「今日10月18日は、清香の二十歳の誕生日だ」

「（（知ってますよ。プレゼントも贈りましたし）（（

そんな事を正直に口にしようものなら目の前の人物が拗ねまくる事が分かりきっている為、彼の3人の息子は余計な事は口にせず、黙って父親の表情を窺った。

「これまでは清香に幾ら害虫が寄り付こうが、あのクソガキが頑として認めなかっただろうが、二十歳を過ぎたらあの子の自由意志で結婚ができるわけだ」

「（（いや、清香ちゃんが二十歳過ぎても、あの清人君なら妨害しまくるだろうな）（（

「（（（（一体何を言いたいんだ？ 祖父さんは）（（（（

思わず遠い目をしてしまった息子達と、祖父の言わんとするところが全く分からなかった孫達に向かって、総一郎から爆弾発言が投下された。

「だから浩一、玲二、正彦、明良、友之。お前達のうち誰でも良いから清香と結婚しろ」

「……はぁあ！？」

「ちょ……、何考えてんだ祖父さん！」

「気でも違ったか？」

「儂は正気だつ！ 何だお前達、清香では不満だとも言う気かっ！！」

総一郎に纏めて怒鳴りつけられた面々は、ある者は困惑し、ある者は些か呆れつつ言葉を返す。

「いや、確かに清香ちゃんは可愛いし、気立ては良いのは分かってるけど」

「結婚となると色々とは話は別ですよ」

「そうだな。妹みたいなものだし」

「それに今までキチンと名乗れていないのは、どっからどうみても祖父さんと親父達の自業自得だろ？」

「散々当時の話は聞いてるぜ？」

「その尻拭いを俺達にさせようつてのは、少しムシが良過ぎませんか？」

口々にやんわりと責められた総一郎は、巨大企業を一代で築き上げた『経済界の優駿』と誉れ高い高潔な雰囲気をかなぐり捨て、単なる困った孫バカ老人に変貌した。

「五月蠅い口答えするな！ 清香の結婚相手には、儂の保有している柏木産業の全株式を譲渡してやる！」

「お父さん！？ いきなり何を言い出すんです！」

「そんな事を言つて、もし変な人間の手に渡つたりしたら！」

「全発行株式の15%ですよ！？」

瞬時に血相を変えた息子達に、総一郎はあくまでも真顔で宣言する。

「だからそうならない様にお前達、気合い入れて清香を口説くんだ。儂が可愛いかった1人の孫娘と、感動の再会ができるかどうかはお前達の働きにかかっているんだ。分かったな！！」

「……」

そのままふんぞり返る祖父を前に、指名を受けた5人の孫達は何とも言い難い顔を見合わせて黙り込んだが、ここでドアを開ける音と共に、冷え切った声が割り込んだ。

「ああ、皆何を黙り込んでるの？ 気の毒なお祖父様のたつての願いを叶えてあげるのが、孫としての当然の務めだと思わない？

だけど、私の記憶に間違い無ければ、お祖父様の孫娘はもう1人居たと思っていたのだけど……、気のせいかしら？」

そこで雄一郎の長女で柏木産業に勤務している真澄が予告なしに現れ、その彼女の一言でそれまで決して快適とは言い難かった食堂内の空気が凍りついた。

「真澄っ……、お前今日は残業……」

「全て終わらせました。……そうですか。たった1人の孫娘、ですか」

母親譲りの美貌にうすら笑いを浮かべつつ真っすぐ自分を目指して歩み寄る孫娘に、総一郎は蛇に睨まれた蛙の如く、固まったままダラダラと冷や汗を流す。

「い、いやっ！ 決してお前の存在を忘れていたわけではっ！」

「そうですね。確かに孫娘ではありますが、《可愛い孫》では無かったというだけですよね？」

「かつ、可愛いに決まっつるだろう！ ただ、お前に関しては、可愛いよりは雄々しいとか凛々しいとかの形容詞が前面に出てきていてだな」

そんな風に必死に弁解を試みる祖父を、側まで来た孫娘は呆れ果てた視線で冷徹に見下ろした。そして仕事上の口調で淡々と指摘する。

「柏木会長、第一線を退いたとはいえ、あなたは未だに柏木産業の

対外的な顔で、社内でも依然として影響力をお持ちです。ご自分の言動に節度と責任をお持ち下さい」

「……っ」

「柏木社長。現時点ではあなたが柏木産業のトップです。まだ柏木家の家長では無いのかもしれませんが、いい加減頑固ジジイの操縦法位会得して下さい。そうでないと振り回される周囲が迷惑です」

「……あのな、真澄」

反論できずに口ごもる総一郎と閉口した雄一郎を知った事かと真澄は睨み付け、淡々と正論をぶつけた。

「ところで、明朝9時から経営会議と伺っております。会長と社長は勿論ご出席の筈。くだらない話は適当に切り上げて、さっさとお休みになる事をお勧めします」

「く、くだらないだどっ!？」

「玉砕が怖くて真正面からブチ当たれない人間が、何を言ってもやつてもくだらないだけですよ」

「なっ……」

「それでは失礼します」

流石に声を荒げかけた総一郎の台詞をぶった切った真澄は、言うだけ言っただけを返し、食堂を出て行った。その背後や閉めかけたドアの向こうから、男達の囁き声が微かに届く。

「全く、年々気が強くなりおって!」

「亡くなった母さんに、年々似てきましたね。父さんをやりこめる所なんか特に」

「五月蠅いぞ和威!」

「しかし相変わらずきつっついよな、真澄姉。あれじゃ嫁の貰い手が無いんじゃない?」

「もついい年だろう? 33だったっけ?」

「友之、明良君。そこまで遠慮の無い言い方はちょっと……」

「姉さんは仕事に生きてるからな。仕方ないさ」
そんな声もドアを閉めると聞こえなくなり、真澄は傍らに控えていた使用人を振り返った。

「部屋に軽食と飲み物をお願い。夕食を食べそびれたのよ」
「畏まりました」

恭しく一礼した背広姿の男性が歩き去ると、真澄はそれに背を向けて足音を吸収する厚さのある絨毯の敷かれた廊下を進む。そして階段を上がりながら、食堂に乱入する直前に聞こえた話を頭の中で反芻した。

(清香ちゃんと従兄弟達の誰かをね……。いよいよ棺桶に片足突っ込んだのかしら、あのお祖父様がそんな発想するなんて)
実の祖父にかなり辛辣な批評をしつつ、真澄の心の中で静かにさざ波が生じる。

(まあ『彼』がそうそう簡単に清香ちゃんに男を近付ける筈は無いけど……、面倒な事になってあまり怒らせたくは無いわ)

そんな事を考えながら真澄は自室のドアを開け、溜め息を吐きながら中へと入ったのだった。

第2話 男達の事情

その日食事当番だった清人が台所で軽やかに野菜を刻んでいると、カウンターの向こうから自身のアシスタントをしている川島恭子が困惑気味に声をかけてきた。

「先生、お忙しい所申し訳ありません。お電話が入っているのですが……」

「うん？ 誰かな？」

手の動きを止めて背後を振り返った清人に、恭子が補足説明を行う。

「小笠原聡と名乗ってらっしゃいます。“小笠原由紀子の息子”と言えば分かると仰っておりましたが」

その台詞を耳にした途端、清人は瞬時にその表情の一切を消し去った。

「……知らないな。そのまま切ってくれ」

吐き捨てる様に告げて再び調理台に向き直った清人に、恭子は諦めて了解した旨を告げる。

「分かりました」

多少気まずい思いをしながら恭子はリビングの奥に戻り、電話の向こうに一言断りを入れて切ったが、間を置かず再び着信音が鳴り響いた。立場上再び恭子が受話器を取り上げ応対してから保留にし、恐る恐る清人にお伺いを立てる。

「先生、先程の小笠原さんからまたお電話ですが……」

今まさに中華鍋で油を熱し炒めに入ろうかと思っていた清人は、憤然と舌打ちをして火を止め、乱暴な足取りでキッチンとリビングを横切った。

(どうやってこの番号を調べた?)

向かつ腹を立てながら保留音を響かせている電話の受話器を取り上げ、相手に何か言う隙を与えず、もの凄い棒読み口調で伝える。

「只今おかけになってる番号は、現在使われておりません。番号をお確かめの上、再度お掛け直し下さい」

言うだけ言ってガチャンと乱暴に受話器を戻した清人は、些かキツイ視線を恭子に向けた。

「川島さん。今後この人物からの電話は、一切取り次がないで下さい」

「あの、でも……」

「まだ何か？」

常に自分に従順な恭子がここで口ごもった事を清人は不思議に思ったが、続けられた台詞で再び表情を険しくした。

「先程の男性は、自分は先生の弟だとも仰ってまして……。でも先生に弟さんが居るなんてお話は」

「川島さん。俺の家族は、亡くなった両親の他は清香だけです。そのつもりで。勿論この電話の事は、清香の耳に入れる必要はありません」

「わ、分かりました」

慌てて頷いた恭子に背を向け、清人は調理を再開したが、なかなか動揺と苛つきは収まらなかった。

（今更何だつてんだ！ 胸くそ悪いっ！ それに……）

一心不乱に中華鍋を振るっていた清人だったが、少ししてまた邪魔が入った。

「あの、先生。柏木さんからお電話が入っていますが……」

「浩一から？ 何の用だ……、こんな中途半端な時間に」

大学以来の腐れ縁である浩一からの着信を告げられた清人は、反射的に通常なら就業時間内である事を掛け時計で確認し、眉をしかめながらもキツチンを離れた。

「もしもし？ 何だ浩一、まだ仕事だろうか。ろくでもない用だつたら速攻で切るぞ？」

不機嫌さを隠さず応対を始めた清人の声を耳にしつつ、リビングのテーブルで頼まれていた資料の整理を再開した恭子だったが、清人の苛立たしげな呻き声に思わず無言で視線を向けた。

「はあ？ 今夜？ お前いきなり何を……」

何事かと思つたものの恭子はおとなしく作業を続け、幾つかのやり取りの後、清人は不承不承といった感じで会話を終わらせる。

「……分かった。いつもの場所で9時だな。時間を合わせて行つてやる」

「どうかされましたか？」

そんな憎まれ口をたたいた清人が受話器を戻してから、恭子は静かに声をかけてみた。すると話している間に幾分感情が落ち着いたので、清人がいつも通りの柔和な笑顔で振り返る。

「ああ、川島さん。今日帰りがけに原稿を届けるのをお願いしてましたが、やはり俺が行く事にしますから」

「予定が変わりましたか？」

「ええ、出版社に顔を出すついでに次回作の構想を相談して、軽く食べて時間を潰した後浩一と待ち合わせする事にしました。……それで川島さんに一つお願いが」

「何でしょう？」

急に真顔になった相手に恭子が若干固めの表情で応じると、清人は淡々と“お願い事”を述べた。

「夕食を2人分準備してしまいましたし、清香を予定外に1人で夕食を食べさせるのは可哀想なので、一緒に食べてやって貰いませんか？」

それは確かに妹を溺愛している清人らしい台詞ではあったが、おそらく長く1人暮らしを続けている自分への心配りをも含んでいる

と分かっている恭子は、うつすらと笑いながら了承の言葉を返した。

「先生のシスコンぶりは相変わらずですね。そういう事でしたら、喜んでお相伴に預かります」

「それは良かった。それではもう少ししたら出掛けますので、後は宜しく願います」

「畏まりました」

そんなやり取りの後、帰宅した清香と入れ違いになるように、清人は夕闇が迫る街中へと出て行ったのだった。

出向いた出版社で担当者と結構有意義な打ち合わせを終えた後、軽く腹ごなしを済ませた清人は、その足で待ち合わせ場所へ向かった。

高級ホテルとして名高いラルフリードホテルをエレベーターで上がり、最上階スカイラウンジのバーカウンターに出向く。そこに何人かの男性がまばらにスツールに腰掛けている中で、迷わず1人のスーツ姿の男に近付いて行った。

「よう、待たせたか？」

勝手知ったる仲である気安さから、いつもとは違う碎けた口調で声をかけつつ隣に座った清人に、浩一は苦笑いしてみせる。

「いや、俺も今来たばかりだ。しかし男2人で待ち合わせってのは、正直虚しいな」

「呼びつけた本人が何を言ってる」

清人も苦笑いで返して早速注文を済ませ、顔見知りのバーテンダーと二言三言言葉を交わしてから、肘を付いて浩一に視線を向けた。「それで？ さっさと俺を呼び出した本題に入れ」

その詰問口調に幾分困った様に視線をさまよわせてから、浩一は重い口を開いた。

「……実は、これから暫く俺達が清香ちゃんの回りをうろろするが、黙認して欲しい」

「何だそれは。しかも“俺達”？ 分かる様に話せ」

「それなんだが……」

そうして浩一が清香の誕生日に自分を含む総一郎の孫達に召集がかけられ、その場で清香との結婚を求められた経緯を話した。

「……そんなわけで、お前の気に障って強制排除されるのは勘弁して欲しいが、電話で済まそうとすると益々お前の機嫌を損ねかねんし、かといって家に押し掛けるのも清香ちゃんの耳に入る可能性が無きにしても有らずだから、お前とちよつと突っ込んだ話もしたかつたし呼び出したって訳だ」

その事情とやらを一通り聞き終えた清人は、その間に目の前に置かれたグラスを持ち上げながら小さく失笑する。

「それなら当然この支払はお前持ちだな。しかし御大は相変わらずだと思っていたが、いよいよ棺桶に片足突っ込んだのか？ そんなくならない策とも言えん策を用いようとするなんて」

奇しくも当日真澄が心の中で断じた表現と酷似した言い方を清人はしたが、当然そんな事は知りようもない弟の浩一は憮然として清人の顔色を窺った。

「まあ正直に名乗る事ができれば一番なんだけどな？ その時、お前フオローなんかしてくれないよな？」

「当然。そんな義理は無い」

「容赦無いな」

溜め息しかでない浩一の前でグラスの中身を一口飲み落としてから、清人はすこぶる冷静に相手に告げた。

「だが、告白自体を妨害しようとは今も昔も思っていない。清香ももう二十歳だし、幾ら子供の頃に香澄さんから散々刷り込まれてると

しても、少しは大人の対応ができる、かも、と、思うんだが？」

その会話の最初と終わりの微妙な口調の変化に、浩一が鋭く突っ込みを入れる。

「あくまで疑問形なんだ」

「流石に30過ぎると、若い子の心境に疎くなってるな」

ニヤリと笑いながら再びグラスを傾けた清人に、些か気分を害した様に浩一が肩を竦めた。

「言ってる！ あちこちで若い女を口説き落としてる癖に」

「口説いた事は無いぞ？ 向こうから言い寄ってくるだけで。お前の方こそどうなんだ？ 柏木物産の御曹司どの」

そこで不毛な言い合いになりかけた事を自覚した浩一は、話題を変える事にした。

「……それはともかく。お前、母方の方と未だに連絡取り合っていないのか？」

軽く顔を覗き込む様に尋ねてきた浩一から視線を逸らし、清人が途端に不機嫌そうに目を伏せる。

「愚問だな。酒がますぐなる話題をふるな」

その態度に浩一が軽く溜め息を吐き、手元のグラスを見下ろしながら淡々と続けた。

「やっぱりな……。実は先週親父の代理であるパーティーに出席したんだが、そこで小笠原氏を見かけた」

「それで？」

「夫人が今入院中だそうで、単身で出席されてた」

言うだけ言って浩一は再び清人の反応を窺ったが、相手はさほど関心が無さそうに呟くのみだった。

「……へえ、それはお気の毒に」

「別に命に関わるような大病じゃないらしい。来月末には退院するとの話だし」

「……………」
途端に漂う冷気にもめげず、浩一はもう一押ししてみる。

「なあ、見舞いに行ったりとかは……………」

「……………」
まるで取りつく島もない様子の清人に、浩一は完全に説得を諦めた。

「分かった。もうこの話は止め」

「今日家に電話があった」

「は？ 誰から？」

いきなりの話題の転換に浩一が戸惑った顔を見せると、面白く無さそうに清人が続ける。

「小笠原聡とか名乗りやがった」

数瞬かけてその名前を記憶の底から浩一が、思わず驚きの表情を向けた。

「え？……………それって、ひょっとしてお前の」

「問答無用でブチ切った」

「お前な」

はああ、と重い溜め息を吐いた浩一に、清人が冷たく言い捨てる。
「だがさっきの話で大体のところは分かった。話を聞く気にはならんが」

それ以上不用意に相手を怒らせたく無かった浩一は、続ける言葉を選びつつグラスを揺らし、琥珀色の液体に浮かぶ氷が微かな音を立てるのを眺めていたが、ふと面白い事を思い出した様に口を開いた。

「しかしよくよく考えてみれば、大したもんだよね、お前の親父さん」

「いきなり何だ？」

訝しげな顔を向けた義理の従兄弟兼親友に、浩一は楽しげに指摘

してみせる。

「だって考えてもみろよ。柏木物産と小笠原産業、業界1位を争ってガチンコ勝負してる総合商社のご令嬢2人をたぶらかして、両方と結婚しちまつたんだぜ？」

それに清人は相手以上に笑いを堪える風情で応じた。

「悪いが今の話、一点だけ訂正させてくれ。親父が口説いたんじゃないって口説かれたんだ。“あの人”も香澄さんも押し掛け女房だった筈だし」

「だろうな。……それじゃあ」

（実の母親を“あの人”呼ばわりか。相当根が深いな）とは思いな
がらも浩一はそれ以上突っ込まず、持ち上げた自分のグラスを清人のそれに近付ける。

「モテモテで羨まし過ぎる、良い男だった叔父上に乾杯」

「乾杯」

軽く触れ合ったグラスがカチンと小さな音を立て、男2人はそれから余計な事は言わずに酒と四方山話を楽しむ事に専念したが、心のどこかで何かが動き出しているのを感じていた。

同じ頃、都内でも有数の規模を誇る総合病院内で、消灯時間を過ぎた病棟内を極力足音を響かせない様に歩く20代半ばの男性の姿があった。

仕事帰りであるのか片手にビジネスバッグを持ち、薄暗い廊下を迷うことなく進んで行く。そして目指す個室に辿りつくと、入口の引き戸をするすると音も無く開いた。

中の人間に気付かれる事は無いと思っただが、予想に反して当面のその主である小笠原由紀子が気配を察した様に顔を向け、それを見て心の中で舌打ちをする。

「……聡？」

「ああ、ごめん。起こしたかな？」

自分譲りの多少癖のかかった柔らかな髪を持つ息子が申し訳なさそうに謝ってきた為、由紀子はベッドから体を起こしながら笑って首を振った。

「ううん、何となく目が覚めたところだったから。それより何かあったの？」

僅かに首を傾げつつ尋ねた母親に、聡は鞆から一冊の文庫本を取り出し、彼女に向かって差し出す。

「大した事ではないけど……、東野薫の新刊が今日発売だったから持って来た。もう寝ていると思ってたから、置いて帰るつもりだったんだけど」

「え？ まさかわざわざ仕事帰りに買って来てくれたの？」

それを見た由紀子は僅かに目を見開き、目の前の本と息子の顔を交互に見やる。その視線を居心地悪そうに受け止めた聡は、まるで反抗期の様な受け答えをした。

「……今日は偶々外に出る用事があった。ついでに買って来ただけだから」

ボソツとそう呟いて視線を逸らした聡を見つめた由紀子は、ほんのりと嬉しそうに笑った。そして愛おしそうに受け取った文庫本のカバーを撫でる。

「ありがとう。明日ゆっくり読ませて貰うわね」

そのまま本の表紙に視線を落としている母親に顔を戻し、聡が静かに声をかけた。

「……母さん」

「何？」

顔を上げた由紀子と真正面から向き合った聡だが、少ししてから自分からその視線を外した。

「……いや、何でもない。遅いしもう帰るよ。次の休みの日にゆっくり来るから」

そう言っただけを返した聡の背中に、由紀子が気遣わしげな声をかける。

「来月には退院できるんだし、忙しい思いをして無理に顔を出さなくても良いのよ？お仕事が大変だろうし」

「ああ、分かっている。それじゃあ」

些か重い気分で母親の病室を抜け出した聡は、そのまま依然として喧騒を保っている夜の雑踏の中へ戻って行った。そして家路を辿りながら、日中の出来事を反芻する。

（一応、電話をしてみたが……、やはり直接は無理か。予想通りと言えば予想通りなんだが……）

未だ直接顔を合わせた事の無い異父兄の事を頭に思い浮かべ、聡はその顔に渋面を浮かべた。

（だが、このままで良い筈がないだろうか？）

そう決意を新たにした聡が、地下鉄のホームへと通じる階段を降りながら呟く。

「本人が駄目なら、この際、妹から接触してみるか」

そんな風に、聡の当面の方針が決定したのだった。

第2話 男達の事情（後書き）

なんか今回主人公が影も形も出ませんでした。次はそんな事は無い筈ですが……。

第3話 First Contact

ある土曜日の午後、時間を見計らって清人達の自宅マンション最寄りの図書館に出向いた聡は、書架の間から首尾良く目的の人物の姿を探し当て、軽く安堵の溜め息を吐いた。

（興信所を使って生活パターンを調べさせたものの……、今時の学生に珍しくバイトはしていないしサークル活動もしていないから接点がない）

そしてスキニージーンズとパーカーの後ろ姿を見ながらほっとしたのも束の間、新たな問題に直面する。

（唯一ここだったらそれなりに自然に知り合いになれるかと思っただが……、どう声をかけたものか。下手するとストーカーとか、不審者扱いされかねないし）

棚を眺めている清香の動きに合わせ、周囲に怪しまれ無い程度にさり気なく移動しつつ、そんな事を真剣に悩んでいた聡だったが、清香が頭を動かす度にゆらゆらと揺れる、真つすぐに床に向かつて伸びているポニーテールを見ているうち、ふと思ってしまった。

（ちょっと引つ張ってみたいな、あれを）

そして次の瞬間、自嘲的な呟きを漏らす。

「……何、小学生のガキみたいな事を考えているんだ？ 俺は」

そうこうしているうちに、既に左手に一冊抱えていた清香が二冊目を取ろうと書架に手を伸ばした。しかし目指すそれは最上段にあり、身長が160cm前後の清香が背伸びしてもギリギリ手が届かない高さだった。

普段なら列毎にキャスター付きの台形の踏み台が置いてある筈が、その日に限って何故か清香が見渡す範囲に見当たらず、ちょっと不

機嫌そうに棚を睨み上げる。そうしてもう一度背伸びしてみようと踵を上げかけた清香に、背後から声がかげられた。

「俺が取りましようか？」

「え？」

反射的に清香が振り向くと、チノパンにボタンダウンのカラシヤツを合わせ、ジャケットを羽織った聡がその前に立っていた。そのまま聡が書架に近寄り上方に手を伸ばす。

「わざわざ踏み台を探してくる程の事では無いでしょう。……確か、これですよな？」

「あ、えつと……」

驚いて軽く目を見開いた清香の前で、181cmの聡は楽々と目的の本を取り出し、彼女に差し出した。

「はい、どうぞ」

爽やかに微笑まれながら差し出されたそれに、清香は一瞬戸惑ったものの、素直に礼を述べて受け取る。

「ありがとうございます。助かりました」

「どうぞ致しまして」

本来ならそこで話が終わる筈が、聡が何気なさを装いながら慎重に口を開いた。

「良くここに来るんですか？」

「はい？」

「そのポニーテールを、ここで度々目に留めていたのでいきなり何を言い出すのかと怪訝な顔した清香が、僅かに首を傾げながら応じた。

「そんなに目立ちます？」

「ええ、………ついつい引つ張ってみたくなる、色と形と長さですか」

真顔で告げられたその内容に清香が一瞬キョトンとした後、堪え

きれずに嘔き出した。

「やだ、子供ですか！？ しかもいじめっ子でした？」

「とんでもない、虐められる方でしたよ？ だから昔出来なかった事を、今無性にやりたくて仕方がなくて」

しみじみとした口調の予想外の切り返しを聞いて、益々爆笑したくなった清香。しかし場所が場所だけに精一杯声量を抑えようとした為、余計に苦しい。

「何ですかそれ？ すっごい迷惑です」

「すみません」

そこで清香は何とか笑いを静め、改めて初対面の苦笑している相手を見やった。

「でも度々つて……、あなたもこの常連さんなんですか？」

「常連と言うかどうかは分かりませんが、月に1・2回は来てますね。本を読むのも好きですが、図書館の独特な空気と匂いが好き、と言うか……」

考え込みながらそう告げた聡に、清香が我が意を得たりとばかりに力強く頷いてみせる。

「そうなんですか！？ 私もそうなんです！ 良いですよ？ 整然と分類されて、年月を感じさせる書物の存在感。日常空間から切り離された雰囲気！」

「あの……、分かったからちよつと移動しませんか？ 他の人の迷惑かも……」

「う……、す、すみません」

興奮気味に叫んだ清香に、割と近くに配置されていた閲覧席から幾つかの視線が突き刺さる。それを察した聡が清香を促し、清香もすぐに状況を理解して奥の方へと移動した。

そして多少笑いを堪える様な表情で、聡が口を開く。

「でも確かに珍しいかもしれませんね。女の子が図書館について、そういう風に熱く語るなんて」

「はい、友達にも良く言われるんです。『そんなカビ臭い事言っていないで、もっと周りに目を向けたら?』って」

思わず頂垂れそうになった清香を宥める様に、聡が口を挟む。

「人の趣味嗜好なんてそれぞれですから、放っておけば良いのでは?」

「それはそうなんですけど、昔から進路もそれで決めてしまったので、余計にからかわれるネタなんです」

「ここではあ……、と軽く溜め息を吐いた清香に、聡は慎重に話を進めてみた。

「進路? 将来何になりたいのかな? 図書館とか本から連想すると……、作家とか?」

「まさか! あんな大変な仕事、私には無理です。私、図書館司書希望で、大学も司書科目を取れる所を選択したってだけで」

大袈裟に片手を振りながら否定した清香に、聡は内心ほくそ笑みながら探る様に言い出す。

「ああ、そうなんですか。なるほど。……だけど『あんな大変な仕事』って、まるで身近に文筆業の人が居る様な言い方ですね」

「……あ、えっと、……まあ、そんなところで……」

途端に視線をさまよわせて曖昧に言葉を濁した清香に、聡はストリートに自分が目的としている人物の名前を口にした。

「まあ作家と言ってもピンからキリまでありますけど、確かに東野薫位の売れっ子作家とかだと大変そうですね」

「……あの」

「え? どうかしましたか?」

「その……、どうしてその名前……」

聡が清人のペンネームを口にした途端、清香の顔が僅かに強張る

と同時に、今更ながら警戒する色が浮かぶ。しかし聡はそれに気が付かないふりをしながら、淡々と話を続けた。

「“東野薫”の事ですか？ 実は母が以前からのファンで、デビュー以来発売された本を全作揃えているんです。この前も新刊を買って届けたので、何となく名前が出ただけなんですが」

「そうなんですか？」

若干警戒の色を弱めた清香に、聡はスルスルと用意しておいた台詞を続けた。

「ええ。母は中でも『覇権の階』^{ハケンノカイ}とか『雷光』とか好きみたいで、繰り返し何度も読んでます。なんでも初期の頃の作品より、ここ数年の作品の方がストーリーも人物描写も各段に良くなってるからと言っていました」

「嬉しいっ！お母様って、本当に本物のお兄ちゃんファンなんですネー！！」

いきなりそう叫びつつ清香が空いている方の手で自分のジャケットの袖を鷲掴みした為、流石に聡は驚いた。

「は？ え？ あの、ちょっと」

「あああっ！ ご、ごめんなさい！」

瞬時に我に返った清香が慌てて手を離しつつ謝罪したが、聡は緊張しながらわざとらしく突っ込んでみた。

「いや、それは良いんですが、お兄ちゃんって……」

すると清香は幾分迷いながら、控え目に口を開く。

「あの…、実は“東野薫”は私の兄なんです」

「本当に？ 凄い偶然ですね」

白々しくそう驚いてみせた聡に、清香が切々と訴える。

「私とその妹だと知ると、『お兄さんのファンなんですよ』と良く言われるんですけど、それならどの作品をどんな風に好きかと尋ねると途端に口ごもったり、トンチンカンな受け答えしか出来ない人

が大半なんです。でもお母さんがファンだつて仰るなら、その通りなんですよね？」

「勿論です。見ず知らずのあなたに、嘘やお世辞を言っても仕方がないし」

苦笑しているふりをしつつ、聡は密かに冷や汗を流した。

(うつ……、下手に俺自身がファンだとか言わなくて正解だった)
そんな聡の内心など知る由も無かった清香は、頷きながら続ける。

「そうですね。実は……、お兄ちゃんがデビューした翌年に両親が急死したもので、私を引き取ったりして金銭的にも色々大変だったみたいなんです」

当時の事を思い出したのか沈んだ表情になって俯いてしまった清香に、何と言葉をかければ良いのか分からない聡は沈黙を保った。

「そんな事もあつて、その後何年か編集さんの言いなりになって大衆受けする物ばかり書いてたから、『その頃の物は今自分で読み返してもつまらない』って言うて……。あ、これは勿論お兄ちゃんがそんな愚痴めいた事を私に言つたわけじゃなくて、アシスタントの人から『私が言つた事は内緒ね』って口止めされた上でこっそり聞かせて貰つた話なんですけど」

顔を上げて弁解する様に告げた清香に、聡が安心させるように宿めた。

「分かりますね、それは。どんな職業だとしても新人時代はあるものだし、そういう場合不本意な事が多いのはお約束ですから」

それを聞いた清香は、安心した様に顔を綻ばせる。

「それで『自分の作品だつて自信を持つて言えるのは、五年目位からの作品だな』って言うてたそうで、さつき名前を挙げてくれた本がその時期の作品だったから、お母さんは本当に良く読んでくれてるんだなあつて思つて、凄く嬉しくなつちやっただんです」

「そんな風に言って貰えるなんて、母が聞いたら喜びます。今度行った時に伝えますね」

ニコニコと告げてきた清香に釣られて笑顔になった聡だが、ここで清香がささやかな疑問を呈した。

「ご両親とは離れて暮らしてらるんですか？」

「いえ、同居してますが、今入院中なので」

「え？ご病気なんですか……」

途端に心配そうな表情を浮かべた清香に、聡が取り繕う様に続ける。

「でも大した事じゃありませんから。確かに手術はしましたが経過は順調で、来月末には退院できますし。……そんな心配そうな顔をしてしないで下さい」

何となく罪悪感を覚えてしまった聡が清香に言い聞かせていると、少しの間何やら迷っていた様な清香が躊躇いがちに言い出した。

「あの……」

「どうかしましたか？」

「お見舞い代わりと言ってはなんですけど……、そんなにお兄ちゃん作品のファンの方なら、サインとか貰いましょうか？」

聡にとっては願ったり叶ったりの申し出だったが、あからさまに喜びを露わにする事はできず、控えめに問い返した。

「え？ それは嬉しいですが……、色々にご迷惑では？」

「私は構いません。せっかくですから最新刊とかにサインして貰って、そちらのご自宅に送る様に手配しましょうか？」

「あ……、それはちよつと……」

「何か不味いでしょうか？」

親切に清香がそう申し出たが、そうなると自分の名前と住所を教えなければならず、早々に自分が清香に接触した事が清人にバレる

危険性に気がついた聡は、慌てて考えを巡らせた。

偽名を使ったり知人の住所を教えて誤魔化す事も考えたが、本来欲しかったのはサイン本ではなく、清人への足掛かりだった事から考えて、継続的に清香と連絡を取り合える状況を作り出す事が最優先だと結論を出す。そして短い時間の間に脳内をフル回転させ、目の前の人物を何とか丸め込めそうな流れを捻り出した。

「……うーん、サインを貰うだけでも悪いのに、新刊まで頂くのは正直言つて気が引けるんです。それに……、せつかくだから母が読み込んでいる本にサインして貰えないかと。書き手として、その方が先生も嬉しくないでしょうか？」

「言われてみれば、そうかもしれないですね」

「ですがそちらに本を送りつけるとなると、貴方の住所を聞かなくてはいけません……、先生に保安上不用意に見ず知らずの人間に住所を教えない様に言われていませんか？ 勿論俺は不特定多数の人間に漏らす気はありませんが」

「そうですね……、ファンと言つても色々な人が居ますから、出版社でも公表してないって聞いてますし」

聡の繰り出す話に頷きつつ考え込んでしまった清香に、聡は優しく笑いかけながら打開案らしき物を口に出した。

「だからあなたさえ良ければ、あなたの携帯番号かメルアドを教えてくださいませんか？ 2人で連絡を取り合つて、直接本をやり取りすれば良いかと」

「あ、なるほど。その手がありましたね！ そうしましょう！」

嬉しそうに同意し、左手に抱えていた本を棚の空いているスペースに乗せ、斜め掛けしたシヨルダーバッグから今にも携帯を取り出しそうな様子の清香に、自分がそう誘導したにも関わらず聡は頭を抱えなくなつた。

(見ず知らずの男に住所を教えるのは確かに危険だが、あっさり携番やメルアドを教えるのもどうかと思うんだが……)

そして自分の携帯のプロフィールには本名の“小笠原聡”の名前で登録されている事を思い出し、あっさり赤外線通信でデータ送信はできないと判断する。

そして何か考える前にジャケットのポケットから財布を取り出し、更にその中から仕事で使っている名刺を取り出した。

「……ああ、すみません。今手元に携帯が無くて。代わりにこれを渡しておくので、後で都合の良い時に連絡をくれませんか？ 仕事でないので名刺入れを持って無くて、財布に入れててくれたびれた奴で申し訳ありませんが」

続けて取り出したボールペンでサラサラと裏面にメルアドと携帯番号を書き込んで清香に差し出した名刺には、聡が職場で名乗っている父の旧姓である“角谷聡”の名前が刷られてあった。それを受け取って眺めた清香は、少し困った顔をする。

「……ええと、ごめんなさい。“すみや”さんですか？ それとも“かどたに”さんか“かどや”さん……」

「ああ、そういえば自己紹介がまだでしたね。“すみやさとる”です。でもちゃんと確認して貰えて嬉しいですね。いい加減な人間はそのまま流して、次回に自分が適当に思った読み方で声をかけますから」

実際、これまでに何度か不愉快な思いをしていた聡が思わず嬉しそうに本音を述べると、清香は多少恥ずかしそうに話を続けた。

「こちらこそ名乗るのが遅れてすみません、佐竹清香です。仕事柄、読み書きに關してはお兄ちゃんが五月蠅いんです。それに加えて、人様の名前を間違えるなんて失礼極まりない。社会人としての礼節に欠けるから、曖昧な場合には初回にきちんと確認する様に」って念を押されてて」

「そう。先生は清香さんの事がよほど大切なんですね」

「どうしてそう思うんですか？」

同じ事を友人に話した時は「口うるさい」とか「厳しい」とか評された経験しかない清香は意外に思ったが、聡は目元を和ませながら当然といった口調で続けた。

「だってそれは清香さんが社会に出てから恥をかかないようになっていう、先生の優しい心配りからきている言葉でしょう？ 凄く大事にされてるのが、その一事で分かります」

そう告げられた清香は間接的に清人を褒められた事ですっかり嬉しくなり、満面の笑みで聡を見上げた。

「はい！ お兄ちゃんは頭が良くて優しくくて何でもできる自慢のお兄ちゃんなんですよ。だから私も大好きです！」

「そう……」

その時、聡は自分の胸中に、何とも言い難い感情が宿ったのを感じた。

それが清香から絶対的な思慕と崇拜を受けている清人に対する嫉妬心と、兄である清人に対するその感情を躊躇い無く表に出す事のできる清香への羨望である事に気付くのは、もう少し先の事になるのだった。

第4話 交錯する思惑

「いただきます」

夕食時、清香と食卓を挟んで挨拶をした清人は、常より微妙に多い皿数と手の込んだ料理を眺め、箸を動かしながら不思議そうに尋ねた。

「……清香、何か今日は随分気合いを入れて作ったんだな」

「うん！ だって嬉しい事があったから」

如何にも上機嫌に言い出す清香の、“聞いて聞いて！”的な無言の訴えを醸し出す瞳を見た清人は、笑いを堪えながら尋ねてみた。

「へえ、因みにどんな？」

「今日図書館で、お母さんがお兄ちゃんデビュー以来の熱烈なファンだって人に偶然出会って、色々な話を聞いてきたの」

「そうか。例えばどんな話？」

「あのね、出版作品を全部コレクションしているのはお約束でしょうけど、装丁が傷まない様にオリジナルの手製のカバーをかけてるんだって」

「そんな風に大事にして貰ってるとは、有り難いし作家冥利に尽きるな」

自分の作品を大事にして貰っていると聞いて悪い気がしないのは当然であり、清人の顔も自然に緩む。

「それで、お兄ちゃんはこれまで色々なジャンルで書いてるでしょう？ 一般的な文芸書とか他にエッセーとかミステリーや各種ルポやノンフィクション、恋愛物や時代劇とかSFまで手を広げちゃって」

「まあ、書きたいものを書いてるうちに、際限なく幅が広がってしまっただが」

「それでその方、ご丁寧にジャンル毎に色柄を変えてカバーを作っ

ているから、お兄ちゃんが新しいジャンルに手を出す度に『今度はどんな物にしようかしら？』って楽しそうに、でも真剣に悩んでるんですって」

「俺が雑食作家なばかりに、見ず知らずの女性を散々迷わせる結果になって申し訳ないな」

そこで苦笑いを一層深くした清人に、清香が顔付きを改めて神妙に言い出した。

「それでね？ お兄ちゃん。お話しているうちに分かったんだけど、実はその人今入院中なんですって」

「それは……、それなりの年齢の人だろうし、心配だな」

思わず同情する口調と表情になった清人に、清香が軽く首を振りながら続ける。

「でもすぐ退院予定だから心配しないで欲しいし、変な事を聞かせて却って悪かったと謝られたわ。だけどその話を聞いて、私つい『お見舞い代わりにお兄ちゃんのサイン本でもさしあげましょうか？』って言ってしまった……」

そう言っただけで顔色を俯けた清香を眺めた清人は、目元を緩ませて優しく笑いかけた。

「分かった。それは清香の親切心から申し出た事だし、気にしないで良いよ。俺なんかのサインで喜んで貰えるなら、幾らでもするから」

それを聞いた清香は、弾かれた様に顔を上げ、嬉しそうに礼を述べた。

「ありがとう、お兄ちゃん！」

笑みにすこぶる満足しつつ、清人が早速どの本にサインして渡そうかと思案する。

「じゃあ……、出版社から貰った最新刊が残っているから、早速それだけでも」

「あ、ちよつと待つて！」

「どうした」

慌てて引き止めた清香に清人は訝しげな顔を向けたが、清香は順序立ててその理由を口にした。

「あのね、できればお母さんが普段読み込んでいる本にサインをして貰えないかって頼まれてるの」

「そうなのか？」

「うん、サインして頂くだけでも恐縮なのに、本まで頂けないってそれに愛着のある本にサインを頂けた方がお母さんも喜びそうだからって事なんだけど、どうかな？」

幾分心配そうにお伺いを立てる清香の顔を見て、清人は破顔一笑した。

「それなら俺もそれで構わない。大事に読み込んで貰ってる本を見たら、俺も嬉しいし」

「良かった！　じゃあ今度預かってくるからお願い」

「分かった。しかしその人は良識と謙虚さを兼ね備えた上、母親思いの親孝行な人だな。そんな風に思いやって貰って、そのお母さんは幸せだ」

「そうね……」

しみじみと感想を述べた清人だったが、ここで何故か清香が箸の動きを止めて何やら考え込んでしまったらしい事に気がつき、気遣わしげに声をかけた。

「どうかしたのか？」

その問い掛けに清香は一瞬何と言ったものかと迷う風情を見せたが、ぼそぼそと正直に思った事を口にする。

「あ、えつと……、大した事じゃ無いんだけどね？……私も親孝行、したかったかなあ、なんて」

「……清香」

思わず何とも言い難い顔で清人が口を閉ざし、自然と重苦しくなったその場の空気を払拭しようと、清香がわざとらしく明るい声を張り上げた。

「だから！ 親に親孝行出来なかった分、親代わりに面倒見てくれるお兄ちゃんの老後の面倒はみてあげるからね！ 安心して！」
「……なんだそれは？」

いきなり飛躍した話の内容に清人が眉を顰めたが、清香は勢い込んで続けた。

「だってお兄ちゃんつたらもう31なのに、結婚どころか女性と付き合ってる気配すら感じないんだもの」

その妹の訴えに、清人は呆れた様な溜め息を吐く。

「あのな……、未成年の妹が居る家に、女性をとつかえひつかえ引つ張り込んだりできると思うのか？ お前が知らない所でそれなりにやってるから、清香が心配する問題じゃない」

「それなら今までどうして結婚の話が出てこなかったの？」

「清香が自立して幸せな結婚するのを見届けるまでは、自分の事は考えられないから」

真顔で淡々と、自分の中での既定路線を語った清人に、今度は清香が溜め息を吐きたくなった。

「あのね……、そんな事言ったら、お兄ちゃんは忽ち40過ぎるわよ！？ だから私のせいで1人寂しい老後を過ごす事になったら、面倒みてあげるって言ってるの」

椅子に座りながら些かふんぞり返る様に姿勢を正して宣言した清香に、清人がクスツと小さな笑いを漏らす。

「別にそうなくても、清香のせいじゃないと思うが？」

「いいの！ それに……、お兄ちゃん以上に格好良くて頭が良くて

頼りになる男の人なんてそうそう居ないんだもの。だから私の方が一生独身っばいし……」

多少いじけた様に呟いた清香に、とうとう清人は笑い出し、何とかそれを堪えながら結論づけた。

「それについては明らかに俺のせいだな。分かった。じゃあその時は、2人で静かな老後を過ごそうか」

「そうしようね！」

自分達の将来についての、ブラコンシスコン2人組の会話はそれでひとまず円満に終了し、その後清香が清人に色々話し掛けつつ食事を続けたが、何故か清人は何かを考える風情で受け答えをした。そして食べ終えて椅子から立ち上がりつつ、すまなさそうに清香に声をかける。

「清香、悪いが来週一つ締切があつて、予定が詰まってるんだ。後片付けを任せて良いか？暫く書斎に籠もるから」

それに清香が素直に頷く。

「分かったわ。二時間位したら珈琲を持っていくね。明日の朝ご飯も私が準備するから心配しないで」

「ああ、頼む」

軽く微笑んでから清人は歩き出し、仕事場に行っている書斎へと入った。そして机の前のキャスター付きアームチェアにドサリと音を立てて座る。

大きめのその背もたれに寄りかかりながら、清人は斜め上方向を見るともなしに見つつ、先程までとは打って変わって無表情で呟いた。

「……親孝行、か。『親孝行したい時に親は無し』とは良く言ったものだな」

そして次に上半身を起こし、机に肘を付いて両手を組む。そこに

額を押し付ける様にして、不機嫌そうな呻き声を漏らした。

「しかし、不愉快な事まで思い出したな。……………ふざけるな」

この時、清香がはつきり告げなかった事もあり、清人は清香が知り合った“母親がファン”だという人物が清香と同年輩の女性だと何となく思い込んでしまっていた。しかもその人物が最近自分を苛立たせている張本人と同一人物であるなどは、夢にも思っていなかったのだった。

本来、清香に関しての観察力洞察力が鋭過ぎる清人が、珍しくそんな些細な勘違いをした日の翌日。明るいつ後の日差しが差し込む、ガラス張りの広い店内の壁際でシャンプーを済ませた清香は、スタッフに誘導されて鏡の前の椅子に座った。

さほど待たされる事もなく、指名をしていた明るいオレンジ色に近い髪的美容師がやってきてその背後に立って声をかけてくる。

「やあ清香ちゃん、お待たせ」

笑顔を振りまきながらふわりとカット用のビニールケープを自分の周りに広げた玲二に、清香は鏡の中の彼に笑顔を返しつつスルリと袖に腕を通した。

「今日もお願いします、玲二さん。でも私って贅沢よね？」

「何が？」

ケープを清香の首の後ろで止めつつ、首にかかる程度の髪を僅かに揺らしながら玲二が尋ねると、清香がクスクスと笑いながら理由を述べた。

「だってカリスマ美容師と人気も高い玲二さんに、電話一本でこちらの都合に合わせていつでも予約を入れて貰えるんだもの。しかも毛先を揃えるだけなのに。他の女の人達に知られたら、絶対恨まれ

るわ」

それに玲二は清香の髪を纏めたタオルを外しつつ、笑って応じる。「可愛い清香ちゃんかわざわ俺に会いに来てくれるんだから、時間を空けるのは当然だよ?」

「もう、相変わらず上手なんだから」

苦笑した清香の髪を、玲二は滑らかな手の動きで肩から背中へと流した。

「言っておくけどお世辞じゃないよ? 本当に、会う度に何にも染まっていない清香ちゃんを見ると……」

そう言いながら玲二は後ろから両手を回し、清香の両サイドの髪を耳の横で指で挟んで長さを測る様に伸ばしつつ、僅かに屈んで清香の顔に自分の顔を寄せた。そして鏡の中の清香に向かって、艶やかな流し眼を向ける。

「上から下まで余す所無く、俺色に染め上げてみたくなる……」

「ぜえ〜ったい駄目っ!」

大抵の女性はこれで落ちるところが、清香は頬を染めるどころか、気分を害したらしい顔で盛大に否定してきた為、さすがの玲二もへこみそうになった。

「……酷いな。そんなに嫌わなくても」

すると清香が猛然と理由を述べる。

「だって美容師さんって、会う人会う人私の髪を見るなり『あら素敵な髪ね! でも若いんだからもう少し明るい色にした方が絶対似合うわよ? ついでに軽くパーマもしてみない?』とか何とか上手いこと丸め込もうとするんだもの!」

憤然としながら訴えられた内容に、玲二は苦笑いしながら立ち直った。

「ああ、カラーやパーマが嫌な訳ね……。因みにその理由、聞いて

も良い？」

「だつてお兄ちゃんが『自分の髪がくせ毛で明るめの色だから、この黒くてサラサラの髪が好きだ』って言つて、嬉しそうに髪を撫でしてくれるんだもの。うっかり職業上の口車に乗つて変えたりしたら、そんな事してくれなくなるかもしれないでしょう？」

「……そうかもしれないね」

取り敢えず同意の言葉を返しながら玲二は手を動かし、肩甲骨にかけりそうな長さのストレートヘアを少しずつヘアクリップで頭に留めてカットの準備を進めた。

「じゃあいつも通りの長さで、揃えるだけで良いんだね？」

「はい、玲二さんの腕の振るい甲斐が無くてすみませんが、宜しく願ひします」

「任せて」

くすくすと笑いながらも、次の瞬間真面目な仕事上の顔になった玲二は、クリップを一つ外して指に挟みこんだ髪に向かつて鋏を動かした。しかし頭の中では先程の話を思い返し、些かげんなりする。

(……、嬉々として年頃の妹の髪を撫で回すなよ清人さん。絶対、あちこち触りたいだけだろ。危ないな)

思わず愚痴を言いたくなつた玲二だったが、今日顔を合わせた時からいつも以上にこにこしている清香を見やつて、ふと第六感的なものが働いた。

「ところで清香ちゃん。最近何か良い事があつた？」

「え？ どうしてそんな事を聞くの？」

「いつもより何となく機嫌が良いかな」って。客商売だから観察眼はそれなりにね。特に魅力的な女性に対しては」

目を丸くした清香に、玲二は手を止めないまま茶目っ気たっぷりに言つてみる。すると清香は納得したように話し始めた。

「凄いな〜、玲二さん。実は昨日嬉しい事があって」

「へえ、どんな事？」

「お母さんがお兄ちゃんとの熱烈なファンって言う人と知り合いになつて、色々あつてその人と連絡先を交換したの」

好奇心で尋ねてみたものの、何やら不穏な物を感じてしまった玲二は慎重に尋ねてみた。

「……ちよつと聞くけど、その知り合った人って、勿論女の人だよな？」

「ううん、男の人」

（はあ？ それじゃあ得体のしれない男に連絡先を教えたって事か！？）

サラツと言われた内容に、玲二は流石に手の動きを止めて慌てて確認を入れた。

「因みにそれ、清人さんに話した？」

「ファンだってお母さんの事？ 勿論嬉しいって言ってたけど？」

「いや、そうじゃなくて……、連絡先を交換した息子さんの事」

「別にわざわざ話す事じゃないかと思つたから、言つてない、かな？」

僅かに首を傾げ、怪訝そうに自分が話した内容を確認している清香を見て、玲二は腹立たしく思つた。

（何だよ清人さん！ いつもなら俺らが清香ちゃんを誘つたりしようものなら、露骨に邪魔したり圧力かけてくる癖に！ どうして今回に限って疑いもしないんだ？）

そこまで考えて、ある一つの可能性に行き着く。

「……清香ちゃん。ひよつとして清人さん、締め切りが近いとか？」
その問い掛けに、清香は完全に目を見開いて驚愕した。

「凄い！ どうしてこの場に居ないお兄ちゃんの事まで分かるの？ 玲二さん、ひょっとして最近超能力に目覚めた!？」

「は、はは……、さすがにそれはどうかな」

天然つぷりを如何なく発揮し、嬉々として食い付く清香に顔を引き攀らせつつ、玲二は内心で深い溜め息を吐いた。

（清人さん、あんた何で肝心な時に使い物にならないかな!? しかしあの人が締切位で清香ちゃんの監視が緩むとは考えにくいが……。まあ、仕方がない。今日は俺が情報収集に勤しむ事にするか）
そう腹を決めた玲二は、再び手を動かしながら清香から必要な事を漏れなく聞き出す事に専念した。

「因みに清香ちゃん。その人とどこでどんな風に知り合ったの？」

「昨日図書館に行つて、レポートを書くための資料を探してたの。学内の図書館は粗方目を通してたから、他に参考になるのはないかなつて。そしたら……」

そして繊細な手の動きで玲二が毛先を揃えている間、清香は巧みに誘導されて前日出会った悟との一部始終を語った。

「……そんな風に意気統合して、結局本を借りた後、図書館の隣のカフェでお茶を奢って貰ったの。『お手数をかけるので、是非ともこれ位奢らせて下さい』って。流石一流商社勤務の人は、気配りも欠かさないのね」

心底感心した様に目を閉じて1人納得している清香に、前髪を揃えていた玲二は激しく脱力して思わず床に蹲りたくなった。

（清香ちゃん……、悪いけど、そいつどう聞いても胡散臭さブンブンだから！ もっと警戒心持とうよ!）

しかし取り敢えずの小言はひとまず横に置いておく事にし、玲二は何とか最後まで笑顔を保ちながらカットを終わらせた。そして「

じやあまたお願いします！」と無邪気な笑顔を見せる清香を見送った直後、緊急召集をかけるメールを兄と従兄弟達に一斉送信したのだった。

第5話 秘められた確執

浩一が鞆を片手にビジネススーツ姿で小料理屋くらたの前に立つと、まだ営業時間内にも関わらず暖簾が店内にしまい込まれ、準備中の札が入口に掛けられていた。一瞬戸惑ったものの店内の明かりと人の気配に、苦笑して引き戸を開ける。

カラカラとドアの開ける音で奥のL字型のカウンターに囲まれた調理場の女性と、右手奥の座敷席に陣取っていた男達が浩一に目を向け、それぞれ笑顔を向けてきた。

「日曜まで仕事だったのか？お疲れ」

「そんな所だ。馬鹿な部下の尻拭いほど、疲れるものは無いな。：しかし早じまいしたんですか？ 奈津美さん。愚弟が迷惑をかけて申し訳ない」

真つ先に声をかけてきたこの店の主である、上下白の仕事着のまま座敷で寛いでいる修に苦笑してみせた浩一は、次にカウンターの向こう側で予め用意されていた料理を取り分けているその妻の奈津美に向かつて軽く頭を下げた。しかし彼女は笑って手を振る。

「あら、良いのよ。修さんの大事な清香ちゃんの一大事なんですよ？ お店を開けていたってそわそわして仕事にならないもの」

そう言われてますます苦笑を深めてから、左側に幾つか並ぶテーブル席の横をすり抜けて浩一は座敷に上がり込み、諸悪の根源の弟の隣に立った。

「あ、兄貴、お疲れ」

そう言っただけでへらへら笑いかけてくる玲二に、浩一は疲れた様な溜息を漏らしながら畳に膝を付き、弟の首を絞める真似をしつつ恫喝する。

「玲二、お前な……、人の都合も聞かずに『俺達の愛しの清香ちゃ

んに纏わりつく害虫発見！ 駆除対策を練るべく即刻全員集合すべし！』の文面に、この場所と時間だけ付け足して送るとは良い度胸だな。何様のつもりだ？」

「あ、あはは…、いや、俺もちよつと動揺したかな？」

他の皆が傍観する中、玲二が些か引き攣った笑いを浮かべた所で、タイミング良く浩一用のお通しとグラスを運んできた奈津美が割り込んだ。

「はいはい、浩一さん、その位で。皆さん浩一さんが来るのを今か今かと待つてらしたんだから」

そう言われながら目の前の空席に小皿とグラスを並べられた浩一は、あっさりと怒りを引つ込めた。

「分かりました。奈津美さんに免じて許してやります」

「ありがとう。さあ、どうぞ」

笑顔の奈津美に促され浩一が所定の位置に収まると、この場を仕切っていたらしい修が浩一のグラスにビールを注ぎながら玲二に声をかけた。

「じゃあ全員揃った所で、早速始めようか。玲二君？」

それに軽く手を上げて、真顔で応じる玲二。

「はい、じゃあまず俺から報告。何が目的か、清香ちゃんに近付いてる男が居ます。そしてどうしてだか、これに清人さんが気付いて無いらしいという驚愕の事実」

「はあ？なんだそれ」

「ありえない」

「泳がせてるわけじゃ無いのか？」

「もつとあり得ないだろ、即断即決の清人さんが」

その場の殆どの人間が懐疑的な視線を向ける中、玲二は予め協力を要請していた従兄弟に話の主導権を譲った。

「それで今日俺の店に来た時に清香ちゃんから得たデータを元に、

今日明良に調べて貰ってるんで。あ〜き〜ら、ちびちび飲んでんだよ。後は任せた！」

それを受けて、修の弟である明良がグラスを置き、どこからか手帳を取り出して見下ろしながら仔細を話し始めた。

「玲二から連絡貰って、取り急ぎ分かる範囲だけ調べてみたんだけど……、結構面白い事が分かったから報告するよ？」

「おう、何だ？」

「男の個人情報なんて聞いても、面白く無いとは思うがな」

大して気にも留めない様子で促した面々に気を悪くした様子も見せず、明良は淡々と衝撃の事実を告げた。

「故意か偶然か、清香ちゃんに接近してきた男は自称『角谷聡』。この名前で小笠原物産営業部第一課勤務の25歳。実は本名『小笠原聡』で小笠原物産代表取締役社長、小笠原昭の一人息子で……、かつ、清人さんの異兄弟だ」

そう明良が口にした途端、一瞬店内に沈黙が発生し、次いで驚きの声が沸き起こった。

「はああ！？ ちょっと待て！」

「何なんだそれは!？」

「そんな話、初耳だぞ！」

しかしそんな中、年長組である浩一と友之だけは何とも言い難い顔で黙り込んでいるだけなのに気付いた玲二が、訝しげに声をかけた。

「……おい兄貴、友之さん。何で2人だけ平然としてんだよ？」

それに対し、浩一と友之はちらりと互いの顔を見合わせてから、不思議そうに問い返す。

「いや……、お前達知らなかったのか？」

「法事か何かで集まった時、小耳に挟んだ気がしたがな……」

それを聞いて啞然とする修、玲二、正彦の3人に、がっくりと頂

垂れる明良。

「何だよ、2人とも知ってたのか……。気合い入れて調べて損したな……。」

それを浩一は申し訳なさそうに宥めた。

「悪い明良。でも今日の午後に玲二から連絡を受けてから、それだけ調べられるとは大したものだ。伊達に人脈の広さを誇ってないな」「どうも」

そう言われて苦笑するしかない明良から他の面々に視線を移しつつ、浩一が慎重に口を開いた。

「さて、どこからどう話せば良いかな……。佐竹の叔父さんが香澄叔母さんと結婚する前に、離婚歴があつたのはお前達も知ってるだろう？」

「それは勿論」

「だから揉めたんだろうし」

素直に頷く従兄弟達に、軽く頷いて浩一が話を続ける。

「実は叔父さんと最初に結婚してたのが今の小笠原昭夫人の由紀子さんで、前小笠原物産会長小笠原幸之助の1人娘で、清人の母親だ。2年位で離婚して実家に戻り、その数年後に小笠原物産で頭角を現していた昭氏と再婚した。婿養子に入った昭氏とは盛大な挙式披露宴を催したが、清吾叔父さんとは駆け落ち同然で式も挙げなかったから、世間一般的には清吾叔父さんと由紀子さんの結婚の事実は知られていない。清人は佐竹家に置いていかれてその後没交渉だったし、余程の事情通でなければ親子である事実も知られていない」

立て板に水の如く浩一が語り、ここで喉を湿らせる為にビールの入ったコップに手を伸ばす。何となくその場に重苦しい沈黙が満ちたがそのままにしておけず、控え目に正彦が問いを発した。

「……離婚の理由は？」

「そんな事、当人にしか分からんだろ。俺に聞くな」

「それもそうだな」

「それで？」

促してきた面々から僅かに視線を逸らし、浩一が如何にも言い難そうに言葉を濁す。

「……清人の記憶力が抜群なのは知ってたが、あいつ母親が出て行った時の一歳児当時の事をすっかり覚えていらしい。もう驚愕としか言いようがないな。それで……、表からは窺い知れ無い、精神的な部分で相当グレた」

（（（身も蓋もない言い方だな……、否定できないが）））

浩一はその台詞を聞いた者は、この場に居ない人間の事を思い返して全員遠い目をしてしまったが、続く浩一の言葉で意識を引き戻された。

「その後、表向き佐竹家と小笠原家とは没交渉だったんだが、清人の話によると、母方の祖父に当たる小笠原物産の前会長が時々よっかいを出してきたそうだ」

「ちよっかい？」

「って、どんな？」

思わず好奇心に負けて尋ねてくる玲二や明良に、浩一は苦々しい顔を隠す事無く仔細を告げる。

「自分が認めない男との間に馬鹿娘が産んだ孫なんか歯牙にもかけてなかったらしいが、清人の優秀さが分かったら掌を反して嬉々として擦りよってきたらしい。国内最高峰の東成大経済学部に入學が決まった時、『学費は一切面倒みてやるし、小笠原の籍に入れてやる』と恩着せがましく言ってきたんだと」

「……うわ、うちの祖父さん以上のKY」

「そんな事を言って、本気で清人さんが喜ぶと思ってたのか？」

その場全員の気持ちを代弁して問いかけた正彦に、浩一が肩を竦めてみせる。

「『ありがたくお受けします』と言うとでも思ってたんだろうさ。だがさすがに清人が『今まで様子も見ずに放っておいたのに、厚かましくありませんか?』と言ったら、『養育費と慰謝料はたんまりくれてやると言ったのに、全て拒否して今後私達親子に関わらないでくれとほざいたのはお前の父親の方だぞ。俺は情けをかけてやったのに、好き好んで自分の息子に貧乏暮らしをさせた、甲斐性なしの上大馬鹿野郎だ』と暴言を吐いたらしい」

それを聞いた面々は何とも言えない顔で黙り込み、清人の出自は知っていてもそこまでの詳しい事情を知らなかった友之が、顔に嫌悪の表情を浮かべながら続きを促した。

「……………それでどうなったんだ?」

「どうもこうも。清人は『丁重にお断りした』と言ってた」

「『丁重に』ねえ……………」

「『丁重に』の言葉の定義が変わりそうだな」

両手を広げてお手上げ、と言った風情で述べた浩一に、修と正彦が茶々を入れる。それでその場に失笑が漏れ、場の空気が少しだけ回復した。

しかし小さな笑いを収めた浩一が、更に容赦の無い話を続ける。

「それから大学四年の時、あいつの主席卒業が本決まりっぽい時に『うちに入れ。ゆくゆくは社長の椅子を渡してやっても良いぞ?』と厚かましく言われたらしい」

それを聞いた浩一以外の面々は、揃って呆れ顔になった。

「一度で懲りなかったんだ? その祖父さん」

「…ある意味、根性あるよな」

「いや、もう意地じゃないのか?」

「それにしても、もう少し言い方を考えても」
それを受けて、浩一が重々しく口を開く。

「その時、殊勝に小笠原物産にエントリーシートを提出してあっさり内定を貰ったから、小笠原物産に取られるかと焦ったんだ。だが、……卒業直前に某出版社の新人賞を受賞した事と作家デビューを公にして、華麗に就職を辞退しやがった。……同時期に柏木産業でも内定を出しててこちらでも断られたから、小笠原と二股かけられてたと分かった時に祖父さんと父さんに『早く向こうを断らせる』と散々責められた挙げ句、内定を辞退された時には『何で気がつかなかったんだ。お前もグルか!』と怒鳴られまくった」

そんな過去を告白して座卓に突っ伏した浩一を、周りの皆が同情の眼差しで見詰めた。

「……大変だったんだな」

「華麗について……」

「絶対一悶着あったよな?」

ぼそぼそと男達が囁き合う中、再び浩一がゆっくりと上半身を起こし、陰鬱な口調で再び話し出した。

「それから5年位前」

「まだあるのかよ!？」

「おいおい、かんべんしてくれ」

心底うんざりした様な声がかかる中、些か自棄になりながら浩一が話を続けた。

「前会長がいよいよ駄目らしいって事になった時、自分の死後、今現在辣腕を振るってる婿養子の社長が会社を私物化するんじゃないかと不安になったらしい。まだ孫は学生だったし、幾らかでも社長の重しになる駒が必要と考えたんだな。入院先から弁護士を介して『相続人に加えてやるから、大して金にもならんくだらん物書きなど止めて小笠原の経営に参画しろ』と命令してきたそうだ」

「……馬鹿か？その祖父さん」
「見苦しいね、人生の最後に」
「清人さん、怒ったよな。“くだらん物書き”呼ばわりされて」
ある者はがくりと頂垂れ、またある者は溜息を吐いて清人に同情したが、続く浩一の言葉に全員固まった。
「当然だ。会長の病室に、山ほど仏花を送りつけようとしたらしい」
言われた内容が一瞬理解できなかった一同は、頭の中でそれを反芻してから引き気味に感想を述べた。

「いや、幾らなんでも」

「さすがにそれはちよっと……」

「人間としてどうかと思う」

「第一、病室にそんな物を配達する花屋があるのか？」

「モラルに反するだろうが」

それを聞いた浩一が、事も無げに頷く。

「ああ、さすがに配達先を聞いたら、引き受ける所は無かったらしい。どう考えても嫌がらせにしか思えないし、その片棒担いで店の信用を落とすたくは無いだろうからな」

「それじゃあ清人さんは諦めたんですか？」

一縷の望みをかけて顔を引き攣らせながら明良が尋ねたが、浩一は苦々しく吐き捨てた。

「そんな訳あるか！ 大学以来の付き合いだが、あいつはやると言ったら手段を選ばず必ずやり遂げる奴だ。あいつ複数の花屋に日時を合わせて仏花を大量発注した後、その日に運転手付きで幌付きの軽トラック3台を手配して、その荷台に準備した花束を容器毎詰め込んで貰って、翌日の朝八時に入院先の玄関の車寄せに乗りつけた」

「……げ、マジかよ？」

「警備員に追い返され無かったんですか？」

「同時にガタイの良過ぎる体育会系の学生を、30人も現地集合で」

動員してな。バイト料を提示した上で、『今から15分以内に指定する病室にこの荷物を全て運び終えたら、各自プラス1万円の料金を支払うから頑張ってくれ』とやったそうだ。清人は『職員の妨害なんてものともせず、皆嬉々としてきっかり15分でやってくれたぞ』と嬉しそうに言ってたな」

「ただでさえその時間帯は、外来の準備とか夜勤と日勤の引き継ぎとか、検温採血その他諸々で職員が忙しい時間帯じゃないですか」「それを狙ったな。……どこまでえげつないんだか」

過去に看護師と交際でもしていたかの様な冷静なコメントを零す友之に、呆れ果てた呟きを漏らす玲二。最早同意するのも馬鹿らしくなったらしく、浩一が淡々と話を続けた。

「職員に迷惑をかけたのは勿論、他にも入院患者が居る中、病棟をそんなものを抱えて走りまわられてはたまったものじゃない。百歩譲って菊の花束だけだったら病人の好みだと弁解する事も出来るが、当日持ち込んだのは菊の後ろにシキミが段々に整えられている奴だったから、どう見ても仏花以外の何物でもないからな。しかも『小笠原の指示で運び込んでますので、抗議は後から纏めて小笠原がお受けします』と叫ばせながら運ばせたそう、後から会長側に『何を考えているんだ縁起でも無い!』と非難轟々だったそう。勿論激昂した前会長の指示で、遺言書から清人の名前は綺麗さっぱり削除されたらしい」

()()(人生の最後に、とんだ災難だったな……)()()()

そこまで聞いた面々は、ほんのちよつとだけ前会長に同情した。

そこで何を思ったか、急に浩一が座卓に両肘を付き、文字通り頭を抱える。

「その時の事を聞いた時、清人が『花が広い病室だけに収まらなくて廊下にまで溢れて、なかなか壮観な眺めだったぞ? そのまま憤死しそうな会長の記念写真を撮ってあるから見るか?』といいなが

ら当時の写真を差し出してきたんだ。その時のあいつの、悪魔的な
壮絶過ぎる笑顔っ……。今思い出しても寒気がする。それ以降、俺
は絶対にこいつを本気で怒らせまいと心に誓った」

本気で呻いている浩一を見ながら、他の者はさもありなんと頷い
た。

「なるほど。そこまで拗れたら没交渉つてのも納得だな」

「互いに良い感情なんて持てないと思うし、妥当ですね」

「だけど今回、これまで一切面識の無かった弟が、清香ちゃんに接
触を試みた、と」

「その前に、一度清人に電話をかけてきたそうだ。話を聞かずに速
攻でブチ切ったらしいがな」

「清人さんらしい……」

話が次のステップに進んだのを捉えて、浩一が顔を上げて経過を
告げると、皆が苦笑いした。しかし続く台詞に、その場の空気が再
び不穏なものに逆戻りする。

「その話を聞かされた時、俺が小笠原社長夫人が最近入院してるつ
て事をあいつに教えたら、途端に嫌な顔をされてな」

「ちよつと待つてくれ、浩一さん。それじゃまさか、その聡つて奴
が偽名乗つてまで清香ちゃんに近付いたのは、単に清人さんに渡
りを付ける為だつて言うのか？」

「そうとは限らないさ、明良君。偶々仕事上で使つてる通称で自己
紹介して、偶々自分の異父兄が作家だつて事を知らなくて、偶々知
り合つた女性がその人の異母妹だつた事を知らなかつただけかもし
れないだろう？」

飄々と口を挟んで来た友之に、明良が思わず白い目を向けた。

「……………友之さん、自分でも全つ然信じてない口調で言うのは止
めて貰えませんか？」

「はは、自分で言うつても信憑性が無さ過ぎるな」

苦笑いで返した友之の横で、玲二が軽く腕を組みながら納得する。

「うーん、でも何となく分かったな、今回清人さんの反応が鈍かったわけ。全然気にしていない様でいて、やっぱり母親の話聞いて多少は動揺してるとか？ 締切位で清香ちゃんの観察を怠ると思えなかったから」

「それはそうだろうな」

浩一が賛同を示した所で、比較的大人しく話を聞いていた修が話を纏めにかかった。

「じゃあ取り敢えず、清人さんもそんな不純な動機で清香ちゃんに近づく男は即刻強制排除するだろうから、この際俺達も全面的に協力するという事で。清人さんには締め切りとやらが落ち着いた頃合いを見て、浩一さんが友之さんから報告して貰うって事でどうかな？」

「賛成」

「異議なし」

「右に同じ」

「全く厄介だな」

「他人の迷惑を考えろよ」

そんな風に兄弟従兄弟で意見の集約をみた所で、先程から議論の様子を窺っていた奈津美が、新しいつまみの小鉢と酒を運んで持ってきた。そして各人の前に手早く並べてから、最後に夫に配りつつ幾分探る様に問いかける。

「さつきから随分物騒なお話をしているけど、もし万が一さつき言った様に何の下心も無く、偶然2人が知り合っただけだとしたら、その小笠原さんとやらをどうするつもり？」

その問いかけに、修達は淡々と言い返した。

「それは、まあ……、そうだな」

「俺達も鬼じゃないし？」

「一応、強制排除なんて手段は取りませんよ？」

「年長者としての立場から色々言い聞かせて」

「納得づくで、自主的に身を引いて貰うとか」

「そんなところだろうな」

(どちらにしても、清香ちゃん周辺からは排除する方針は変わらないからね)

笑いだしたくなるのを必死で堪えながら、奈津美は夫に言い聞かせた。

「どうでも良いけど修さん？明日朝からお仕事の方もいらっしやるんだから、際限なくお酒を勧めちゃダメよ？」

「分かってるって！」

苦笑して頷いた修に、早速他の面々から冷やかしの声がかかる。

「おいおい、もうすっかり尻に敷かれてるな」

「何とでも言え！ 家庭円満の秘訣は、何と言っても黙って女房の尻に敷かれてやる事だ。覚えとけ、この独り身集団！」

ふんぞり返った修の言葉に、傷ついた様に玲二が胸を押さえてみせた。

「はああ、言われちゃったよ」

「独り身集団で思い出したな、清香ちゃんへの求婚指令。どうするよ」

「取り敢えずそいつの邪魔をしつつ、清香ちゃんとデートしてアリアイ作りにするか？」

「そうだな、あの祖父さんの事だ。俺達に尾行を付けて、清香ちゃんと接触が無いと呼び出されて説教されかねない」

「じゃあそういう事で、当面の方針は決まったな」

そんな風に賑やかに、《くらた》での夜は更けて行った。

第6話 込み上げる怒り

「じゃあお兄ちゃん、ちょっと駅前のカフェまで出かけてくるね？」
その声に、朝食後リビングのソファに座って寛いでいた清人は、読んでいた新聞から顔を上げ、ドアの方を見やった。

「ああ、例の角谷さんから、お母さんの本を受け取って来るんだな」
「うん。お兄ちゃんがサインしてくれるって伝えたら、とても喜んでくれたわ」

「そうか。しかしわざわざこの近くまで足を運んで貰って申し訳無かったな。先方に住所を教えても良かったかも……」

僅かに表情を曇らせた清人に、清香が宥める様に明るく言葉を継ぐ。

「何でも今日は、もともとこの近くに用事があったんですって。本を渡したらそこに行くからって言ってたから」

それを聞いた清人は、どこか安堵した顔付きになった。

「そうか……、それはお互い都合が合って良かったな」

「うん。帰りにケーキでも買って来るね。行ってきます！」

「ああ、気をつけて行っておいで」

そんなやり取りをして清香を見送った後、再び新聞を読み始めた清人だが、電話の着信音に不快気に顔を上げた。

「誰だ？土曜日の朝っぱらから」

小さく悪態を吐きながら新聞を横に置いた清人は、壁際の電話に真っ直ぐ向かった。そして受話器を取り上げて応答する。

「はい、佐竹ですが」

「お久しぶりです、清人さん。友之です」

「……何の用だ？」

妙に嬉しそうに聞こえてきた男の声に、清人の機嫌は確実に悪く

なつた。

浩一を初めとする清香に纏わりついてくる彼女の従兄弟達の1人で、清人の一つ下の友之は、一見人当たりが良く穏和な気質を持っている好青年と思われがちだが、実際は松原工業次期後継者と見込まれるだけの人物であり、その内側に鋭敏な観察眼と胆力を兼ね備えた、早く言えば一癖も二癖もある人物だった。

しかしそれは清人も同様であり、同族嫌悪と言つ言葉がぴったりなこの2人の関係は、浩一とのそれとは異なり以前からとても友好的とは言えない代物だった。

『そんな露骨に嫌な声を出さなくても良いじゃないですか。一つ悪い事を教えてあげようと思つたのに』

「良い事”じゃなくて“悪い事”か？相変わらずだな」

清人は思わず皮肉つたが、相手は平然と切り返してくる。

『あなたには負けますよ。ところで清香ちゃんは？』

「今外に出たところだ」

てつきり清香に電話をかけてきたと思つた清人は、言外に「目的を果たせなくて残念だな」という意味合いを含ませたが、友之は全く気にせず用件を口にした。

『それは好都合。実は彼女が今、会いに行つてる人物は男です。それを教えてあげようかと』

「は？」

いきなり思考停止する内容に清人が絶句すると、友之がどこか思わせぶりに伝える。

『もっと詳しく言えば……、あなたの異父弟だったりするんですよ。その台詞を聞いた清人はたっぷり数秒は固まった後、電話の向こうに怒声を浴びせかけた。』

「何だと!? そんな馬鹿な!! お前、いい加減な事をぬかすな!!」

「……五月蠅いですよ。彼女、その人物をどう言ってたか、思い出してみたらどうです?」

迷惑そうに指摘してくる友之に、清人は取り敢えず怒りを抑えて考え込む。

「そう言えば……、“角谷”って言う苗字は、確かあの小笠原社長の旧姓!? 迂闊だった……。おい、ちょっと待て! 大体どうしてお前がそれを知ってる!？」

矢継ぎ早の言葉に、清人の動揺ぶりが容易に推察できるらしく、友之が笑いを堪える様な口調で説明してくる。

「最初の情報源は玲二です。しかし色々平静さを欠く事があったかもしれませんが、らしくないですね。清香ちゃんに近づく男の影に気がつかないなんて」

「勝手に言ってる!」

忌々しげに吐き捨てた清人に、友之が口調を改めて問い質してきた。

「それで、どうするんです?」

「どう、とは?」

衝撃の事実を告げられた為、些か失調気味の清人が言われた意味を掴み損ねて眉を寄せると、友之が淡々と畳み掛けてきた。

「清香ちゃんに小笠原との一部始終を話した上で、彼らに金輪際近付くなど致命しますか?」

「それは……」

思わず口ごもった清人に、友之が追い討ちをかける。

「そもいきませんよね? 実の母親を死んだ事にし、実の祖父に対して仕出かした非常識な行為の数々を聞いたら、あの素直で純粋な子が『お兄ちゃん酷い、あんまりだわ! 人として最低よ! 軽蔑する

わ、大っ嫌い！」とかなんとか言いそうだ。そんな事を面と向かって言われたら、妹命のあなたにはダメージが大でしょうし」

「……うるさい、黙れ」

律儀にも清香の口調を真似て言われたそれに、清人が静かに恫喝し、そのこめかみに青筋が浮かんだ。それがまるで見えているかの様に友之がクスクスと笑いを漏らしてから、いつもの口調に戻って確定事項を告げる。

『取り敢えず今日は2人の待ち合わせ場所に、体の空いていた正彦を向かせてます。さり気なく邪魔しますから心配しなくて良いですよ』

その台詞で、清人はおおよその事情を把握した。

「全く……、俺が知らないところで皆で集まったのか？」

『ええ、意思統一しました。それで清人さん、今日は病人になって下さい』

「はあ？」

唐突な申し出に流石に清人が戸惑った声を上げたが、友之はそれに構わず話を続ける。

『携帯の電源を切つて、家電も出なければ完璧です』

そこで元々聡い清人は、友之の思惑を瞬時に理解した。

「……なるほどな。清香に心配をかけるのは不本意だが仕方がない」

『どこまでも清香ちゃん本位の人ですね。それじゃあ連絡はしましたから、失礼します』

「ああ、手間かけさせたな」

最後は互いに苦笑しあつて通話を終わらせ、清人は静かに受話器を元の位置に戻した。しかし（くだらない小細工を弄しやがって……）と聡に対する清人の怒りは、それから暫く燻り続けていくのだった。

清香が目指す店に入ると、入り口近くのテーブルに着いていた聡が軽く手を上げて自分の位置を知らせてきた。それに微笑みながら、清香が歩み寄る。

「すみません、遅くなりました」

「いえ、清香さん、こちらこそわざわざお呼び立てしてすみません。しかも先に自分の分だけ注文してしまいましたし」

聡の前に置いてあるコーヒークップを見ながら、清香は向かい側の席に座った。

「いえ、自宅のごく近くですし、角谷さんの方がご自宅から距離がありますよね。……あの、ところで今の“清香さん”と言うのは……」

前回とは違う呼び方でサラリと呼び掛けられた清香は、戸惑いながら尋ねたが、聡は事も無げに言い切った。

「ああ、この前は佐竹さんってお呼びしてましたけど、お兄さんである先生も同じ佐竹さんですから、自分の中で何となくお2人の呼び方を変えてたんですよ」

「はあ」

「清香さんがお嫌なら止めますけど、どうしても駄目ですか？ さやかって言う名前が素敵だから、できればそちらでお呼びしたいと思っていたのですが」

「……えっと、そういうことなら」

「良かった。ありがとうございます、清香さん」

にこやかに微笑みながら微妙に押し強さを発揮する聡に、清香は何故か既視感を覚えた。

（あれ？ 何か、前に似た様な事が無かったっけ？）

何かにつけ、顔に貼り付けた聖人ぶった笑顔とソフトな物言い

清人に知らず知らずのうちに舌先三寸で丸め込まれている清香だったが、あまりの頻繁さの為に逆にはつきりと意識出来なくなっていた。何となくモヤモヤした気持ちを抱えながら、近寄ってきたウエイトレスにカフェオレを注文すると、清香が落ち着いたのを見計らって、聡が小さめの手提げ袋を差し出す。

「それで……、早速なんです、この本に先生のサインを貰えますか？ハードカバーの物を持ってきてしまったので、かさばるし重くて申し訳ありませんが」

「構いませんよ？本一冊位。角谷さんだったら、そんなに恐縮しなくても」

クスクスと笑い出してしまった清香に、聡も自然と目元を緩める。そしてここで唐突に清香は気がついた。

（あ、そうか！ 角谷さんって、何となくお兄ちゃんに似てるんだわ！）

そうと気付いた清香の頭の中で、目の前の人物の徹底観察が始まった。

（パツと見は似てないのよね。強いて言えばお兄ちゃんはキラキラ王子系で、さしずめアレクシス様だし、角谷さんは精悍な騎士様って感じで、例えばジュノーだし……）

密かに愛読しているライトノベルの登場人物に清人と聡を置き換え、清香が軽く妄想に突入していると、ここでウエイトレスがカフェオレを運んできた。軽く会釈して目の前に置かれたカップを取り上げた清香は、それに軽く口を付ける間も注意深く聡に視線を向ける。

（臉もくつきりとした二重だし、目つきが鋭いけど怖くは無いのよね。笑った時に目を細める感じが似てるかな？ それに……、そうか！ 髪質が同じなんだ！）

自分の顔を真正面から見ながら難しい顔で考え込み、次いでニコニコと微笑みだした清香に、聡は幾分怖じ気づきながら声をかけた。「……あの、清香さん。俺の顔に何か付いてますか？」

その問い掛けに、清香は瞬時に我に返った。

「あ！？ えっと、ジロジロお顔を見てすみません。ちょっと考え事をしてまして」

「いえ、大した事でなければ良いんですが」

「あの！ 今お兄ちゃんと角谷さんの事を考えてまして。2人がちよつと似てるかな〜と」

弁解する様に清香が口にした台詞に、聡がピクリと反応した。そして若干言葉を選ぶ様に確認を入れる。

「……先生と俺が、ですか？ 因みにどの辺りがでしょうか」

「はい、髪質とか笑った時の感じが」

「そうですね……」

公表されている写真で顔は知っているものの、未だ直接対面した事の無い兄に似ていると言われた聡は面映ゆい感じがしたが、素直に喜んで良いか分からずに微妙な顔をした。しかし何とか清香に無難な言葉を返す。

「光栄です。先生のような高名な方に似ていると言われて、嬉しいですね」

「高名だなんて、ちよつと大袈裟ですよ？」

クスクスと笑った清香に、聡は慎重に話題を逸らした。

「ところで…、この前お会いした時、清香さんは先生と11歳違いだとか伺いましたが、随分年が離れてるんですね。2人の間に他のご兄弟はいらっしゃらない様です」

「ええ、実は兄とは母親が違つんです」

（よし、かかった！）と話題を誘導するのに成功したと喜んだのも

束の間、続けて聡の耳にとんでもない内容が飛び込んできた。

「兄の実母に当たる人は、兄が一歳の時に亡くなったそうで、その後父が再婚して私が生まれたんです」

「……お亡くなり、に、なつた？」

顔を蒼白にした聡が呆然と呟くと、清香は小さく頷いて続けた。「はい。亡くなった後に位牌とかは実家の方で引き取ったとかではありませんし、写真も皆無なので、どんな人だったのか私は知らないんです。兄も私の母に気兼ねしていたのか、そんな話は一切しませんでしたし」

それを聞いた聡は少しの間黙り込んでから、常より幾分低めの声で謝罪の言葉を口にした。

「……そうですか。すみませんでした清香さん。好奇心からつまらない事を聞いて」

「大丈夫です、気にしないで下さい！ 半分しか血が繋がってない異母兄妹でも、お兄ちゃんと私は並の兄妹より仲が良いって自覚と自信がありますから！」

「確かにそんな感じがしますね」

ドンと自分の胸を叩く真似をして明るく保証してくる清香に、聡は辛うじて笑顔らしきものを顔に浮かべながら言葉を返したが、内心は怒りで煮えくり返っていた。

（母さんを死んだ事にしてるだと？ 幾ら行き来が無いとは言え、あんまりじゃないのか！？ 妹に向ける愛情の100分の1でも向けられないのかよ！？ 母さんが可哀想だとは思わないのか？）

そんな事を考えながら必死に激情を抑えていた聡の頭上から、唐突に男の声が降ってきた。

「……あれ？ 清香ちゃん。どうしてここに居るの？」

「あ、正彦さん。こんにちは。どうしてって……、何がですか？」
かけられた言葉の意味が分からず、清香は不思議そうにテーブルの横に立つ男女二人組を見上げたが、対する正彦は怪訝そうな顔付きで口を開いた。

「実はさつき、清人さんに電話したんだ。今度一緒に飲みに行く約束をしてたからそれについて。そしたら何だか急に具合が悪くなってきた様な話をしだして」

「え？それ、いつの話ですか？」

途端に顔色を変えた清香に内心ほくそ笑んだ正彦が、連れの女性を軽く指差しながら続ける。

「こいつと待ち合わせしてる最中だから10分位前かな？何かキツそうな口調だったから救急車は呼ばないのか聞いたら、清香に付き添って貰って病院に行くから大丈夫って言われて。……何だよ清人さん、まさか俺に心配させない為に、清香ちゃんが側に居るって嘘ついたのか？」

わざとらしく顔をしかめた正彦の前で、すっかり狼狽した清香が立ち上がる。

「本当ですか？ やだ、どうしよう？ 家で倒れてたりしたら！」

「落ち着いて清香ちゃん。取り敢えず電話してみたら？」

「そ、そうですね！」

慌てまくって携帯を取り出した清香は、立つたまま電話をかけ始める。その側に佇んだままの正彦達と共に店中の注目を浴びてしまったが、清香にはそんな事に構っていられる精神状態では無かった。

「正彦さん、どうしよう？ お兄ちゃんの携帯も家の電話も繋がらないの！」

すっかり涙ぐんでしまった清香に、正彦は宥める様に言い聞かせた。

「たまたま電源を切って、病院に行ってるだけかもしれないよ？」

家はここから近いんだから、取り敢えず戻って見たら？ 清人さんなら出かけるにしても行き先位書き置きしてると思うし」

「それもそうですね。ありがとう正彦さん。それじゃあ角谷さん、慌ただしくて申し訳ありませんけど、これで失礼します！！ お兄ちゃんにサインをして貰ったら、また改めてご連絡しますねっ！！」
そう叫ぶやいなや清香は持参したバッグと先ほど聡から預かった紙袋を引っ掴み、もの凄い勢いで店を飛び出した。

「清香さん！ 何かあったらまずいですから、俺が送りま」

「引っ込んでなボーヤ」

すっかり傍観していた聡もここで慌てて立ち上がり、清香の後を追おうとしたが、その腕を正彦が素早く捕らえる。そしてその耳元に口を寄せて囁いた。

「俺はちよつとばかりお前に話があるんだ。……小笠原聡」

その一言が、瞬時に聡の全身の動きを止めた。

第6話 込み上げる怒り（後書き）

本来は次の話と纏めて出すつもりだったのですが、長くなりすぎて切ってしまいました。なるべく早く続きを出すつもりです。

第7話 地雷

(彼女には角谷と名乗ってるのに、その知り合いらしいこいつが、
どうして俺の本名を知ってるんだ?)

聡が自分の腕を掴んだままの男を疑惑に満ちた目で眺めていると、
当の正彦は鼻で笑う様に聡の内心を当ててみせる。

「彼女の知り合いなのに、どうしてそれを知ってる？」って顔だ
な」

「……………失礼します」

長居は無用とばかりに聡がその手を振り払って立ち去ろうとした
が、正彦は益々腕を握る右手に力を込めた。

「俺は話があると言った。…………じゃあ今日はここで。後で必ず埋め
合わせするから」

正彦の後半の台詞は連れの女性に対するもので、彼女は予め予定
を聞いていた為、小さく肩を竦めて苦笑いしたのみだった。

「全く…………、デートの時間が5分足らずなんて、最短記録だわ。し
かも乗り替える相手が男なんて、ちよつとバカにしてない？」

「でもなかなか良い男だろ？」

「そうね。後10年位したら正彦と張るかしら？」

「容赦ないな。初対面の相手をこき下ろすなよ」

「あら、坊やだと思つてこれでも手加減してるわよ？ それより埋
め合わせ、忘れないでよ？」

「ああ、期待してくれ」

聡が黙つたままなのを良いことになり辛辣な事を好き勝手に言
い合つた男女は、正彦が未だ聡を拘束して片手が使えない状態の為、
彼女の方から正彦に顔を寄せて唇が触れあうだけのキスをして、あ
つさりと店を出て行つた。

「座るぞ。お前も座れ。……あ、俺はブレンドね」
「畏まりました」

「……………」
聡を逃がす気は無く、その腕を引っ張りつつ半ば恫喝する正彦。聡の待ち合わせ相手かと勘違いしたウエイトレスが水とお絞りを持つて近寄つて来ると、振り返った彼は途端に愛想笑いを浮かべながら注文した。

それを仏頂面で見やった聡が、取り敢えず再び席に座る。続いて正彦が先程まで清香が居た席に腰を下ろした。

「じゃあ、取り敢えず自己紹介といくか。こっちはお前の事は一通り知ってるし。他人の周囲を色々嗅ぎ回るのは、お前だけの専売特許じゃないんでな」

「それはどうも、お氣遣いありがとうございます」

皮肉を込めて返した言葉にも全く動じる事なく、正彦は顔に薄笑いすら浮かべながら一枚の名刺をテーブルの上に取り出し、そのまま聡の方へ押しやった。それを受け取ってしげしげと眺めた聡は、以前目にした報告書の一部を思い出す。

「《倉田運輸株式会社経理部主任、倉田正彦》……………って事は、ひよつとして清香さんの」

「きちんとそこまで調べたのは誉めてやるが、彼女の前でその先は口にするなよ？」

途端に目つきを険しくして恫喝口調に戻った正彦に、聡も不快気に眉を寄せた。

「どうしてですか。あなた達はれっきとした従兄妹同士で、先程も仲良さげに会話してたじゃ無いですか」

「確かに仲は良いが、従兄妹同士としてじゃない。単なる“父親同士が幼なじみの知り合いの、優しいお兄さん”って言う関係だ」

「はあ？ 何ですかそれは」

理解不能な内容を聞かされた聡は思わず間抜けな声を上げてしまつたが、ここで正彦は反撃に出た。

「お前だつて人の事は言えんだらう？ 本名隠してコソコソと彼女に近付きやがつて。清人さんを刺激したくなかつたんだらうが、とつくにバれてるぞ？」

その台詞に、聡が僅かに顔を強張らせてから、慎重に問い掛けた。

「……それなら、どうして彼女が未だに俺の話の信じてるんですか？」

「清人さんとしてはできれば本当の事を言いたくないんだろ？ なにしる実の母親とは死別つて事にしてるし」

そこで聡が弾かれた様に拳でテーブルを叩き、正彦に問い質した。「それをさつき彼女から聞いて、耳を疑いましたよ！ どの世界に勝手に母親を死んだ事している息子がいるんですか！ 幾ら何でもあまりに酷過ぎます！」

憤慨する聡を見た正彦は思わずテーブルに肘をつき、多少呆れを含んだ表情でしみじみと感想を述べた。

「酷過ぎる、ねえ……。お前、随分幸せに育つたんだな」

「何が言いたいんですか」

ここでウエイトレスが珈琲を運んできた為会話が一時中断し、腹立たしげな聡の前に正彦がブラックで一口珈琲を味わつてから、真顔である事を尋ねた。

「一つ聞くが、お前は清人さんの事を、子供の頃から知つてたか？」すると、その途端、聡が歯切れ悪く答える。

「……いえ、二十歳の頃に、父から初めて聞かされました。そして『今では行き来はしていないから関わるな』とも」

「と言う事は、五年前位？ あの騒動の前後、だらうなあ……。流石に外野が五月蠅くなると思つたか」

「1人で勝手に納得しないで貰えませんか？」

小さな笑いを漏らしながら頷いた正彦に聡の不機嫌さは増大するが、相手はそんな事は斟酌せずに畳み掛けた。

「母親を大事にしようとする心掛けは良いと思うがな。お前が二十歳になる前に、母親から清人さんの事を一度でも聞いた事が無かったんだろ？」

「確かにそうですが……」

「普通に考えたらおかしくないか？」

「それは……、父と再婚した手前、前の家庭に関する事はあまり口に出さなかつたよ」

「お前の父親は小笠原に婿養子に入ったんだろ？ それなのに他で育つてる子供の名前すら口に出さなかつて？ 随分気を遣つてんだな。それともお前の両親、そんなに夫婦仲が悪いのか？」

明らかに挑発する台詞を立て続けに述べる正彦に、以前から両親の微妙な距離感を気にしていた聡は思わず中腰になって片手を伸ばし、その胸元を掴みながら礼儀正しさを投げ捨てつつ唸った。

「ふざけるなよ？ 部外者があまり好き勝手抜かすと」

「それが今更？ と言うか、お前が勝手に暴走してるだけで、母親は清人さんの事なんか何とも思つて無いんじゃないか？」

「そんな事は……」

何かを言いかけてそこで急に口ごもってしまった聡は、至近距離で正彦と見つめ合つていた視線を自分から逸らし、同時に腕も離して元の様に椅子に座つた。それを興味深そうに眺めた正彦は、片手で服の乱れを直しながらぼそりと呟く。

「清人さんにしてみればこれまでの母親との関係が有る無し以前に、清香ちゃんの為にもお前達の事は口にしたくない筈だけだな」

「……どういう意味ですか」

先程の勢いがどこかに消え失せてしまった聡が、取り敢えず聞いてみたという風情で尋ねると、正彦が苦笑気味に理由を告げた。

「あの子の両親はもう亡くなって、近親者つて言えば清人さんだけなんだよ。それなのにその兄に『実は母親と半分血が繋がった弟が居る』つて事が分かったら、清香ちゃんが1人疎外感を感じるとでも思ってるかもな」

「そんな……。ですがそれは」

「それ以上に、母親は死別して弟なんて勿論居ない事になってるから、その事実を話したらあの優しい子だったら『実のお母さんを勝手に死んだ事にするなんてあんまりじゃない！見損なつたわお兄ちゃん、最低！鬼！人非人！』なんて罵倒しそうだ」

「どことなく遠い目をしながらそんな事を言い出した正彦に、思わず聡は真顔で問い掛けた。

「……その場合、どうなると思います？」

「どう、つて、……。そうだなあ。そうしたらあの《妹命》の清人さんのダメージ大は決定だし、再起不能寸前まで行きそうだな。そうなるとその反動で、猛烈な怒りが真っ直ぐそれをバラした人間に向かうのは確実だし」

「ちよつと待つて下さい！ そうすると清香さんには清人さんと俺達の間を知らせないまま、清人さんの怒りを回避しつつ接触を図れと？」

清人の怒りを買う事を思つて流石に青ざめた聡を、正彦は他人事の様に見つめた。

「道は険しそうだな。助けてやるわけにはいかないが、まあ頑張れ。何も知らないで決定的な亀裂を生む類の墓穴を掘らない様に、忠告だけはしてやつたからな。俺の好意を無駄にするなよ？」

「好意なんですか？ 単に面白がつているだけじゃ」

「一理あるな、所詮他人事だし」

「……………っ！」

テーブル上で強く両手を握り締め、顔を引き攣らせた聡に、正彦は椅子から立ち上がりながら更に容赦の無い言葉を投げつけた。

「ああ、肝心な事をもう一つ言うのを忘れてた。さつきも言ったが、柏木、倉田、松原の家が清香ちゃんと縁戚関係にある事は本人には漏らすなよ？ もし万が一口を滑らせたら……、その時は清人さんじゃなく、俺達が制裁を加えるからそのつもりで」

「ちよつと待って下さい。だからどうしてそんな事になってるんですか！」

聡は慌てて正彦の左手を掴んだが、相手は軽々と振り払いつつ、テーブルの横をすり抜けて行った。

「あゝ、説明するのが面倒だから、興味が有るなら本人にさり気なく母方の親族について聞いてみてくれ。それじゃあそろそろ時間なので失礼。コーヒー御馳走様」

「ちよつと待って下さい、倉田さん!？」

しっかりと珈琲代を聡持ちにしつつあっさりとその場を立ち去っていった正彦を、会計をしないまま追い続ける事もできず、聡は諦めて見送った。そして文字通りテーブルに両肘をついて頭を抱える。

「ちよつと待て……。一体これから、俺に何をどうしろと?」

今の話で複雑すぎる現状の一端を把握し、困惑の渦に叩き込まれてしまった聡は、自分の見通しというものが如何に甘いものであったのかを実感していた。

何やら騒々しい物音がドアの向こうから響いて来たと思ったら、自分が寝ている寝室のドアを開けながら叫んだ妹の声に、清人はすこぶる満足した。

「お兄ちゃん、居るっ!？」

ドアに背中を向けて寝ていた為、清人の薄笑いの顔は当然清香に

は分からず、さも今日が覚めたという風情を装いつつ清人はゆつくりと寝がえりを打ち、清香の方に向き直る。

「……清香？ どうした、そんなに慌てて」

「どうしたもこうしたも！ お兄ちゃん、急に具合が悪くなって病院に行ったんじゃないの？ 正彦さんに偶然会って聞いたんだけど！？」

ベッドに歩み寄りながら問い質してくる清香に、清人は多少考え込む様子を見せてから、あまり悪そうに微笑んでみせた。

「そうか……、悪い。正彦君との電話の後、急に痛みが落ち着いてきたから、腹痛で救急車を呼ぶのも気恥ずかしいし、休んでれば良くなるかと思っただ。実際もう落ち着いたし、大丈夫だから」

「電話は？ 家の電話も、携帯も繋がらなかったんだけど？」

「眠ってたから気が付かなかったかな？ 携帯は……、ああ、正彦君からの電話を切った時、うっかり電源を落としてしまったみたいだね。ほら」

枕元に置いておいた携帯を取り上げて清香に差し出すと、確かにディスプレイが真っ黒になっており、清香は呆れ半分安堵半分の溜息を吐きだした。次いでベッドの端に腰かけ、清人の顔を見下ろしながら猛然と説教モードに突入する。

「もう、本当に人騒がせなんだから！ どれだけ心配したと思ってるのよ！！ それに腹痛だって甘く見ちゃいけないのよ！ 第一お兄ちゃんは仕事し過ぎよっ！ 不摂生な生活していると、病気にもなりやすいんですからね！ 言われ無くても自重して頂戴！！」

「うん分かった、反省してる。これからは十分気をつけるから、そろそろ許してくれるかな？ 清香」

「反省してるならもう良いわ。もう……、本当に何かあったらどうしようかと思っただから……。お父さんとお母さんだって病気になるかったのに、急にいなくなっちゃったし……」

「清香……」

最後は涙声の清香の訴えに、清人は流石に罪悪感を覚えた。布団の中から片手を出して伸ばし、清香の頬を軽く撫でながら謝罪しつつ、これ以上暗い雰囲気にならない様に話題を変える。

「すまなかつたな、心配かけて。そう言えば角谷さんには会えたのか？ 途中で引き返したなら相手にも申し訳無かつたが……」

待ち合わせ場所で正彦がちょっとかいを出した事は知りながら、素知らぬふりで清人が尋ねると、清香は気持ちを落ち着かせながらそれに答えた。

「ええ、大丈夫。本の受け渡しをした直後に正彦さんとカフェで会ったの。デートだったみたいよ？ 綺麗な女の人を連れてたから」

「そうか、それなら良かった」

「あ、ちよつと待つててね。今、その本を取つて来るから」

そこで清香がパタパタと寢室を出ていき、すぐに一冊の本を手にして戻つて来た。

「お待たせ。ほら、素敵でしょ？」

そう言つて嬉しそうに清香が差し出した一冊のハードカバーの本を、清人はいつもよりゆっくりとした動作で上半身を起こし受け取った。そして手に本来感じる以上の重みを感じながら、黙つて見下ろす。

いつもの清香なら常には見せない、その表情を消した清人の状態を訝しんだかもしれないが、緊張が一気にほぐれた事で些細な事には気が付かなかつた。

「このお手製のカバーって、和紙を使つてるんだよね。それでこんな綺麗な流水紋のデザインの物なんて、私初めて見た。凄いセンス良いのね、角谷さんのお母さんって。そう思わない？」

「ああ、確かに綺麗だな。これは」

微妙な言い回しで、清人は個人のセンス云々ではなくカバーに對してのみの感想を述べたが、清香は益々笑顔になって言い募った。

「それに墨を使って、細筆でタイトルを書いている。達筆だよねえ、私昔お母さんに習わされたけど、全然ものにならなかったし」

「……安心しろ、俺も習字は大してできない」

「あと、本棚の肥やしとかにしてるんじゃないかと、本当に大切に読み込んでくれてるんだね。だって少し角が擦り切れてるし、ページの真ん中辺りに指で捲った跡がうっすらと付いているもの。角谷さんのお母さんって、本当にお兄ちゃんのファンなんだね！ こういう人達に心配かけさせない為にも、自己管理は徹底しようねっ！」

「……そうだな。気をつけるよ」

明るく結論付けた清香に、清人は胸中を綺麗に押し隠して素直に頷いて見せたが、ここですっかり気分を良くした清香が、自覚しなのまま余計な事を言い出した。

「何だか角谷さんに益々親近感湧いてきちゃったな。お兄ちゃんと大学も学部も同じな上、どことなくお兄ちゃんに似てるし」

「……俺に似てる？ どこが？」

途端に若干目を細めて問い返した清人だが、清香は清人のそんな変化に気付かないまま口を滑らせた。

「えっと、ちょっと明るめの色調でくせ毛の髪質もそうなんだけど、笑った時の目元の辺りが何となく似ていて格好良いなあって」

テレテレと笑いつつ清香としては（やっぱりお兄ちゃんは格好良いと思う）という意味表示のつもりで言った台詞だったのだが、清人は（俺と似てるだど？ しかも清香が俺以外の男の事を格好が良いだなんて、冗談じゃない！）との認識しか持てなかった。

「じゃあお兄ちゃん、今日は一日寝てるのよ？お昼ご飯は食べられそう？」

密かに怒りまくっている清人の心中など分からない清香が無邪気

に尋ねてきた為、清人は辛うじていつもの口調を保った。

「……いや、あまり食欲が無いからこのまま寝ている。夕飯だけ準備してくれるか？」

「分かった。消化の何か良い物を準備するね」

そう言つて寢室のドアを静かに閉めて清香が出て言つてから、清人は押し殺した声で腹立たしげに吐き捨てた。

「ふざけるなっ！人の領域にずかずかと踏み込んで来やがって！！」
如何にも憎々しげに手の中の本をベッドの端に投げ捨てた清人は、怒りに燃える目で携帯に手を伸ばし、迷わずにアドレス帳からある番号を選択する。待つ事数秒で、向こうが応答すると同時に、清人は捲し立てた。

「榊原さん、佐竹です。大至急お願いしたい事があります。今回は色ボケ学生の素行調査とはわけが違いますから、経費は使い放題で構いません」

『ほう？ それはそれは豪勢な。それで、依頼内容は？』

「小笠原物産営業部第一課が今現在取り扱っている案件が何か、可能な限り調査して下さい。報告書に纏める必要はありません。分かった時点でその都度連絡を」

『そりゃあまた、随分毛色の変わつたご依頼で』

電話の相手は面白そうに笑いを堪えていたが、清人は冷たい声のまま核心に触れた。

「特に、第一課主任の角谷聡の業務内容に関してを集中的に」

その口調で何かを察したのか、電話の向こうで小さく溜息を吐く気配がしてから咳き漏れる。

『……要するに、そいつが今回の先生の標的ですか。気の毒に』

「宜しく願います。請求書が回ってきたらいつもの口座への振り込みで宜しいですね？」

『はい、それで。こちらこそ宜しく。それじゃ早速動きませす』
お互いにどこまでもビジネスライクに話を進め、2人はあっさり
と通話を終わらせた。

「……………俺を本気で怒らせたな？ 聡。たつぷり後悔させてやるぞ？」

手にした携帯をまるでそれが本人でもあるかの様に睨みつけながら、清人がまだ見た事も無い弟の名前を口にしていた事など、当の本人は知る由も無かったのだった。

第8話 八つ当たりの末に

清香に置いてけぼりを食らわされた拳げ句、色々と頭を悩ませる内容を聞かされてしまった聡は、悩んだ末夜になって清香の携帯に電話してみた。病院に付き添っているなら電源を落としているかと思いきや、予想に反して普通に応答がある。

『はい、佐竹ですが』

その落ち着き払った声に、聡は（兄さんは大した事は無かったんだな）と安堵する半面、（俺の名前をアドレス登録してくれて無いんだろうか……）と微妙に気落ちしながら口を開いた。

「清香さん、角谷です。今日はわざわざ出向いて頂いて、ありがとうございます。うございました」

そう礼を述べると、電話の向こうの気配が途端に慌てたものになる。

『そんな！ 角谷さんにお礼を言って貰う必要なんかありません！いきなり中座して、私の方こそ却って失礼してしまいましたし。その上こちらからご連絡しないで、本当に申し訳ありませんでした』

声の調子だけで清香が最敬礼している様子が見える気がして、聡は思わず笑い出しそうになった。それを何とか抑えながら、清香を宥めにかかる。

「それは構いませんから。自分の家族の具合が相当悪そうだと聞いたら、誰だって動揺しますよ。それで……、先生のお加減はいかがですか？」

それを聞いた清香が、益々申し訳無さそうな口調で詳細を伝える。

『ご心配かけてすみませんでした。実は思ったより酷く無かったみ

たいで、帰宅したら大人しく横になってたんです』

「そうだったんですか？それは何よりでしたね」

『はい。病院にも行かずに済みましたし、夕食も消化の良い物を食べられましたし、もう心配要らないと思います』

「それを聞いて俺も安心しました」

聡は口ではそう述べたものの、内心では（ひよつとしたらと思っただが……。やっぱり仮病で、あの男とグルか）と断定し、密かに項垂れた。

しかし1人で悶々としている訳にもいかない状況を思い出し、慎重に会話を再開する。

「それで……。清香さん。実はあなたにお話ししないといけない事があるのですが……」

『はい、何でしょうか？』

怪訝そうに問い返す清香に、（もう兄さんにはれているなら、変に名前を偽っていたら益々印象を悪くするに決まっているし、ここは思い切って）などと考えつつ、聡が口を開いた。

「俺は初対面の時から自分の事を角谷と名乗ってましたが、実は本名は違うんです」

『え？ それなら角谷と言うのは偽名なんですか？』

「いえ、偽名では無くて職場で使っている通称です。初めてお会いした時、プライベートにも関わらず、ついっつかりそちらを名乗ってしまつて、なんとなく訂正する機会を逸したままズルズルと。申し訳ありません」

『それは構いませんが、そうなるに本当のお名前は何て仰るんですか？』

不思議そうに尋ねた清香に、聡は一拍空けて本名を告げた。

「……小笠原です」

『小笠原、さん、ですか？』

「はい」

怪訝な声でどこか躊躇いがちに問い返す清香に、聡は叱責もしくは非難されるのを覚悟した。

(やはり《小笠原》の名前位は知ってたか？ どうして黙っていたのかと責められても仕方が無いが、ここで正直に言っておかないと後々面倒になりそうだし)

聡が自分の周囲に無自覚に醸し出すそんな緊迫した空気とは裏腹に、清香はどこかのんびりと答えた。

『私は全然気にしてませんよ？ ついうつかり、慣れた名前を口にしただけなんですよね？ 私を騙そうとして意図的に名乗ったわけじゃ無いんですから』

(やっぱり母さんに関しての事は、兄さんから微塵も聞いて無いんだ……)

明るく朗らかに言われた為、却って絶望的な心境に陥ってしまった聡だが、更に予想外の台詞が耳に飛び込んできた。

『でも角谷さ、ええつと……、小笠原さんが、25歳ってお伺いした年齢の割に落ち着いて見える訳が分かりました』

「え？ それはどういう意味ですか？」

『どういうつて……、小笠原さんはもう結婚していて、結婚を機に奥様の方の苗字に改姓したけど、仕事上は旧姓のまま通しているんですよね？』

「は？」

『もう既に家庭を持っているなら、年齢より落ち着いて見えるのも道理です』

しみじみと語られた清香の話に聡は固まり、次いで慌てて弁解した。

「それは誤解です清香さん！ 俺は結婚なんかしてませんから！」

「え？ そうなると本人に向かつてはもの凄く言い難いですし、口に出すのもとても失礼なのかも知れませんが……、ひよっとして小笠原さ」

「あのですね！ 今、何か変な想像をしてませんか？ お願いですから俺の勤務先を思い出して欲しいんですけど！？」

「何やらまた妙な考えを口にされる前にと聡が必死で訴えた内容に、携帯を介して清香が考え込む気配が伝わる。」

「小笠原さんの勤務先ですか？ えっと、確か小笠原物産の営業部で……、小笠原？ え？ あ、まさか……」

そこで言葉を区切った清香に、聡は心底安堵しながら事情を説明した。

「ええ、父がその代表取締役社長を務めていまして。色々対外的な事があって、入社するに当たって父の旧姓を名乗らせて貰っているんです。父は婿養子ですから」

「ああ、そうなんですか。良く分かりました。親の会社に入社したりすると、確かに色々大変そうですね」

（何だかもう、どっと疲れが……）

一連のやり取りで精神的な疲労感を一気に覚えてしまった聡は、これ以上会話を続行させる事を諦めた。

「それでは先生の容態が確認できましたし、これで失礼します」

「いえ、こちらこそ心配して頂いてありがとうございます。お兄ちゃんにサインして貰ったら、お渡ししますのでまた連絡しますね？」

「ありがとうございます。おやすみなさい」

そうして表向き平穩に会話を終わらせた聡は、携帯を耳から話して深々と溜め息を吐いた。

「……とても諸々を打ち明ける雰囲気でも、気力も保てなかったな。……また今度にしよう」

極めて後ろ向きな発言をして現実から目を逸らした聡は、初手の躓きが後々祟るといふ事に、この時まだ気付いていなかった。

「うん、やっぱり社長の息子って分かれると色々大変なのかな。あまり気にしなくても良いんじゃないかと思うけど」

リビングで首を傾げながら清香が携帯を閉じると、パジャマ姿で起き出してきた清人がドアから顔を覗かせていた。

「清香？ 誰かと電話してたの？」

「うん、小笠原さんと」

「小笠原？」

途端に目を細め、ピクリと眉を動かした清人に、清香が事も無げに聞いた内容を伝える。

「角谷さんの事。初めて会った時、つい職場で使ってる通称を名乗ってしまって、今までうっかり訂正するのを忘れていて申し訳無かったって謝られたの。別に大した事無いのに、律儀な人だよね」

「……へえ、つい、うっかり、ねえ」

かなり皮肉を交えた清人の口調だったが、自分の考えに浸っていた清香はそれに気がつかなかった。

「それにね？ お兄ちゃんの具合を心配して、わざわざ電話してくれたのよ。お店に置き去りにしちゃって失礼な事をしたのに、気を悪くしたりしないで。やっぱり思いやりのある、優しい人だわ。そう思わない？」

「……ああ、そうだな。今度本を渡す時にでも、俺も礼を言っていたと伝えてくれ」

苦々しい思いを抑えつつ清人が型通りの受け答えをすると、清香は益々嬉しそうに言い出した。

「うん、ちゃんと伝えるね。それで、そんな優しい人のお母さんってどんな人だと思う？」

「さあ……、どんな人だろうな……。あまり想像できないな」

話が嫌な方向に向かって行くのを察した清人は、不機嫌そうに話の流れを断ち切ろうとしたが、清香は思うまま話し続ける。

「やっぱり凄く優しく、子供思いの人だと思うな。あのカバー1つ見ても繊細で上品そうな印象を受けるし、一度会ってみたいな」
「なんて」

「駄目だ!!」

「お、お兄ちゃん？ 急にどうしたの？」

突然自分の台詞を遮って怒鳴った清人に、清香は驚いて目を丸くした。次いで恐る恐る清人に問いかけると、幾分バツが悪そうに目を逸らしつつ、しかし語気強く清人が言い聞かせてくる。

「その女性は病気で入院中なんだろう？ 経過が良いと言っても見ず知らずの他人が押し掛けて良い状態の筈が無い」

「それは勿論、そんな事はしないわよ？ 会えるなら会ってみたいなくって言うてみただけで」

「それから、その小笠原さんとやらの前で『お兄ちゃん』とか連呼してないだろうな？」

「え？」

慌てて弁解しようとした清香だが、今までまさに清人の事をそう連呼していた清香は固まった。それを見越した様に清人が畳み掛ける。

「常々『子供扱いされたくない』と文句を言ってる割には、言動が子供じみてるぞ。相手がそういう風に気遣いができる大人で、それにふさわしい言動をしているなら、対するこちらもそれ相応の対応が必要なんじゃないか？ 俺に向かって『お兄ちゃん』と呼び掛けるのは構わないが、他人に向かっては『兄』と表現する位の分別は持って欲しいものだな。清香はもう二十歳なんだし」

「……はい」

「そして、必要以上相手に馴れ馴れしい態度を取らないのが大人というものだろう。これから言葉遣いに気をつけるよ？」

「気をつけます」

すっかり頂垂れてしまった清香を見て、清人は八つ当たりだと完璧に理解していたものの、怒りを抑える事ができずに素っ気なく言い捨てながら踵を返した。

「じゃあ、俺は水を飲んで寝るから」

「うん、おやすみなさい」

後日、清香と聡は連絡を取り合い、その週の土曜日に某ホテルの一階ロビーに入っている喫茶店で待ち合わせた。

しかし席に追い付いた清香が聡に問われて清人について話そうとする度に、妙に口ごもったり、言い直したり、口癖の『お兄ちゃん』が『兄』に置き換えられていたり、聡からすると挙動不審さが際立っており、サインして貰った本を受け取るのもそこそこに、清香を問い詰めた。

「……………という事があつたんです。おに……………、あの、兄にしてみれば、私は相当子供に見えてるんだろうなって思……………、見えているかと思えますし、小笠原さんに対しても、初めて会った時から結構馴れ馴れしい言葉遣いをしてたかな〜って、いえ、失礼をしていたのではと、今更ながらに不安になりました」

清人に叱責された夜の経過を一通り語り、俯いて黙り込んだ清香を見た聡は頭痛を覚えた。

(……………兄さん、何も清香さんに八つ当たりする事はないでしょう？……………そもそも原因の俺が言うべき事じゃないが。さて、どうしようか?)

いつも明るい笑顔を向けてくる清香が、すっかり萎れて落ち込んでいるのを可哀想に思った聡は、何とか慰めようと口を開いた。

「清香さん、先生は何もあなたが憎くてきつく当たったわけでは無いんですから。それは分かっているでしょう？」

「ええ、はい、それは重々」

「どうやら先生が危惧したのは、俺が年相応に見えずに落ち着いていると清香さんが評した為に、清香さんのいつもの口調だと失礼に当たるかも考えた事らしいです。言わば老婆心ですから、あまり気にされない方が良いでしょう」

「それはそうなんですが……」

「だからその対策として、俺はこれから清香さんに対して、同年代の人間に対する様に喋るから。清香さんもそのつもりで」

「はい？」

いきなり聡の口調が変化したのと、言われた意味を捉え損ねた清香は、思わず軽く目を見開きながら相手を見返した。すると聡は面白い物でも見つけた様に、ニヤリと笑いながら主張を繰り返す。

「俺も見ず知らずの女性に馴れ馴れしく話しかけるのはまずいと思つてたから、これまでは仕事上の口調に準じて喋ってたけど、もう見ず知らずじゃないから構わないよね？」

「あ、えっと、それは……」

「だから、俺が馬鹿丁寧な言葉遣いをして、かなり年長者に感じさせる事が問題なんだろう？ こういう言い方をする相手には、清香さんも気兼ねなく話せるよね？ ああ、いつそのこと『清香ちゃん』とか『清香』とでも呼ぼうかな？」

「いえ、あのっ！そ、それは……」

流石に気恥ずかしいものがあり、それは止めて貰おうと口を挟みかけた清香に、聡があっさりと告げた。

「勿論俺の事は『聡さん』とか『聡』で良いよ？ 寧ろ聡って呼んで欲しいな」

「……小笠原さんって、実はタラシなんですか？」

「タラシ？ 俺が？」

清香が思わず疑惑の目を向けると、それを真正面から受けた聡は一瞬キョトンとし、すぐにお腹を抱えて爆笑した。いきなり大笑いされた清香が、些かむくれながら文句を言う。

「そこまで笑わなくても……」

「ごめん、悪かった。だけど自分の名前を呼び捨てにして欲しいって口にしただけで、女たらし扱いされたのは初めてだったから」

何とか呼吸を整えた聡は、清香に謝ってから苦笑交じりに話を続けた。

「話を戻すけど、だから俺の前では幾らでも『お兄ちゃん』って言うって大丈夫だよ？ 君の事を笑ったりしないし、寧ろ清香さんが先生の事を『お兄ちゃん』って話している時は凄い良い笑顔をしているから、見ているこっちまで嬉しくなる。『兄が』って緊張して話している時とは雲泥の差だ」

そう嘘偽りの無い本音を漏らすと、清香がそれを吟味する様に聞き終えてから、小さく笑って礼を述べた。

「ありがとうございます。やっぱり小笠原さんは私と比べると随分大人だと思います」

それに聡がすかさず突っ込みを入れる。

「ほら、清香さん。そういう時は何て言うんだっけ？」

それに清香は反射的に「うっ……」と詰まりながらも、嬉しそうに言い直した。

「えっと……、その。ありがとう、聡さん」

「ああ。まだ二十歳なんだし、そのうち自然に慣れるよ。無理に急いでつまらないしがらみに捕らわれる事もないさ」

そうして2人の周囲の空気が穏やかになった所で、聡が徐に話題を変えた。

「ところで……、清香さんと図書館で会った時、確か榊原康孝の本を借りてたよね。この作家が好き？」

「ええ、作品は大体目を通してるし」

「そうか。それならこれ、要るかな？」

「何ですか？」

ゴソゴソとジャケットの内ポケットから長方形の白い封筒を取り出した聡は、その封をされていない中身を取り出して見せた。

「映画の試写会の招待券。榊原康孝の『春の波濤』が原作だって。小耳に挟んだ所では、当日監督と原作者も来るらしいよ？」

「え？ 映像化の話が有ったんですか！？ 全然知らなかった！ これどうしたんですか？」

驚きと期待で目を輝かせた清香が、思わず身を乗り出して手元を覗き込んで来た為、聡が笑って続けた。

「職場が総合商社の営業部だからね。付き合いとかで色々回ってきたりするんだ。それでこれを見つけたから2枚掠め取ってきたんだけど、良かったら一緒に見に行かない？」

「勿論行きます！」

打てば響くように答えた清香に、聡も満足そうに頷く。

「良かった、貰って来た甲斐があったよ。じゃあここに書かれてある日時に、どこかで待ち合わせしようか。予定は大丈夫？」

「はい、空いてますから。ありがとうございます、凄く嬉しい！」

兄に怒られた事などすっかり忘れ去ってしまったかの様に、ニコニコと上機嫌に微笑む清香を見て、聡は思わず本音を漏らした。

「うん、清香さんは落ち込んでる顔もそれなりに可愛いけど、笑うとそれより数倍可愛いな」

常には清人以外の者にあまり口にされない賛辞を耳にして、清香は動揺して声を上げた。

「お、小笠原さんっ！？」

「聡」

容赦の無い笑顔での駄目出しに顔を若干引き攣らせつつ、清香が窘めようとする。

「う、……え、さ、聡さん。つまらない冗談は」

「本気だけど？」

「……………っ！」

真顔でサラツと言い返されてしまった清香は、本人が自覚しないままその頬を赤く染めていた。絶句して僅かに俯いてしまったその顔を真正面からじつくりと眺めながら、聡は自分の中で愛おしさが込み上げてくるのを自覚する。

（うん、やっぱり兄さんが清香さんを溺愛しているのが分かる気がする）

この時、聡の頭の中を占めていたのは清香と清人の事のみで、あれほど重要だった母親の事は綺麗に忘れ去られていた。

第9話 愛しのマスクメロン様

試写会が行われる小さなホールの前で待ち合わせた清香と聡が談笑しながら中へ入ると、こじんまりとしたロビーの向こう側から一組の男女が目敏く清香達を見付けて近寄って来た。

「あら、清香ちゃんじゃない。こんな所で奇遇ね〜」

ビジネススーツ着用でも華やかさが漂う真澄が偶然を装って声をかけ、聡にしてみれば些かわざとらしいその問い掛けに、清香が笑顔で応じる。

「あ、真澄さん！それに浩一さんも、お久しぶりです！」

「ああ、元気そうだね、清香ちゃん」

「2人も試写会に来たんですか？」

「ええ、そうなの。付き合いで招待券を買ってね」

女同士でその場で和やかに話し始めると、男2人はその背後で微妙な視線を交わし合った。

（確かこの2人、柏木家の……。このタイミングって事は、絶対兄さんが仕組んでるよな）

（やっぱり清人から連絡を買って、お邪魔要員として顔を出した事を分かってるよな、彼。あからさま過ぎるし）

聡が溜め息を吐きたいのを堪え、浩一が神経質そうに眼鏡のブリッジを指で僅かに上に押しやると、この状況を面白がっているかと思えない真澄が思い出した様に聡に顔を向ける。

「そういえば……。どこかでお見かけした事があると思ったら、そこに居るのは確か小笠原物産営業部の角谷さんじゃないかしら？」

清香ちゃんの彼氏？ なかなか隅に置けないわね」

「い、いえっ、あのっ！ か、彼氏とかって言うのは聡さんに失礼でっ〜！」

くすくすと笑いながらの問い掛けに、聡は（白々しい……。ライ

バル会社の課長クラスと顔を合わせた事なんかあるか」と思っただけだったが、清香は少々焦った。

（そうか！ 聡さんと真澄さんって同業者だから、仕事関係で顔を合わせた可能性があったんだ。良かった、まだ本名で小笠原さんって紹介してなくて）

そして互いの紹介がまだだった事に気がつき、初対面ではない空気だったものの一応声をかけてみる事にした。

「えっと、真澄さんがおっしゃる通り、こちらは小笠原物産の角谷さんです。最近ちよつとした事でお知り合いになりました。私、角谷さんに今回の招待券を頂いたんです」

「あら、そうだったの。良かったわね」

にこやかに頷いた真澄から視線を移し、清香は聡に向かって説明を続けた。

「角谷さん、こちらは昔から家族ぐるみで親しくお付き合いしている、柏木真澄さんと弟の浩一さんです。お2人とも柏木産業に勤めてますから、角谷さんとはどこかでお会いしてるかもしれませんね」

「ああ、そうなんですか。清香さんから話は聞いてますし、勿論柏木のご令嬢と御曹司の事は、以前から存じ上げてました。この機会にお見知り置き下さい」

「こちらこそ、小笠原物産のホープと評判の高い角谷さんとお知り合いになれて、光栄です」

「ご冗談を」

思い切り社交辞令的な会話を交わす3人に、清香がのんびりと声をかけた。

「会場が開いたみたいですし、後は中で座って話しませんか？」

「あら、そうね」

「何も立って話し込む事もないか」

そう言っただけでスタスタとホール内に向かって歩き出し、（2人きり

になんかさせないわよ？」というオーラを醸し出しつつ、「清香ちゃん、ここら辺にしましよう？」と当然の如く手招きする真澄達に、聡は今度こそ小さな溜め息を吐いた。

結局4人は向かって左から聡、清香、真澄、浩一の順番で横に並んで着席し、主催者の挨拶や上映開始まで時間があるのを幸い、女2人は連れそつちのけで四方山話に花を咲かせていた。

「そういえば清香ちゃん、年が明けたら成人式があるのよね」

「はい、お兄ちゃんが振袖を勝ってくれました。それに久しぶりに同級生と会えるのが楽しみです」

嬉しそうに語る清香を見て、真澄がしみじみと口調を改めて言い出す。

「本当に……、月日が流れるのって早いわね。おじさま達が亡くなった時、清香ちゃんは中一だったのに」

「そう言えばお葬式の際は一家揃って来て貰いましたね」

「ええ。今の清香ちゃんを見たら、ご両親もお喜びになるだろうなと思って」

思わずしんみりとなってしまった空気を払拭したかったのと、以前から気になっていた人物の事が話題に上っていた為、ここまで黙って2人の会話に耳を傾けていた聡が、礼儀正しく会話に割って入った。

「清香さん、ちょっと聞いても良いかな？」

「どうかしたんですか？聡さん」

「その……ご両親ってどんな人達だったの？」

「え？ どうしてですか？」

キョトンとしながら尋ね返す清香に、聡は幾分言い難そうに話を続けた。

「いや、ちょっととした好奇心なんだけど……。先生が公表している顔写真を見ると、かなり整った顔立ちをされているから、ご両親が

結構美形だったのかと思って」

「美形、ですか？」

(うつ……、かなり苦しい言い訳だったか。何だか柏木さん達の視線が痛いし……)

以前から母親の前夫に対しての好奇心はあつた為、思い切つて口にしてみたのだが、清香の背後から自分に向かって投げかけられる柏木姉弟の胡乱気な視線を受け、聡は一気に居心地が悪くなった。しかし自分越しにそんな無言のやり取りが交わされているなど夢にも思っていない清香は、怪訝な顔で考え込みながら自分の考えを口にする。

「うーん、確かにお兄ちゃんは美形の部類に入るけど、お父さんは娘の私から見ても、間違つてもその範疇には入らないと思いますよ？ お兄ちゃんは母親似なんじゃないかな？ どのような人なのか分からないけど」

「そうなんだ」

冷や汗をかきつつ言葉を返した聡の声に、真澄達の声が重なる。

「そうねえ、清香ちゃんも香澄おばさん似だと思つし」

「だからパツと見、2人は兄妹に見えにくいんだよね。年も少し離れてるし」

「う……、浩一さん、微妙に気にしてる事を。それじゃあ私達が親子に見えるとか言つんですか？」

少し恨みがましく言われた台詞に、浩一が苦笑しながら弁解した。

「いや、流石にそこまでは。でも初対面の人に、叔父姪位の関係に間違われたりしない？」

「……時々間違われます」

ボソツと呟かれた言葉に、清香以外の3人が小さく吹き出す。それに「皆酷い！」とむくれた清香を3人がかりで宥めてから、再び会話が再開した。

「佐竹のおじさまはハンサムって言うよりは、貫禄がある顔立ちって言った方が良いわよね」

「そうだね。気後れしないでどっしりとしてて、人に安心感を与えるって言うか……」

実際に会った事のある真澄と浩一が、清香の父である佐竹清吾について分かるような分からないような論評をしていると、清香がうんうんと頷きながら同意した。

「その通りですよ。強いて物に例えるならお兄ちゃんはマスクメロンですけど、お父さんはジャガイモですし」

「……は？」

「え？ 私、何か変な事を言いました？」

（もの凄く変な事を言った）と全員が思ったが、それをストレートに清香に告げたら傷付くだろうと思つた3人は黙ってアイコンタクトを行う。その結果、3人の中で一番年下かつ一番立場の弱い聡が、慎重に口を開いた。

「あの……、清香さん？ そのジャガイモってというのはどういう意味？」

「えっと、だって茄子の様につるんとした印象じゃなくて、どっちかって言うところとちよつとごつい感じで。でもちゃんとお料理すれば色々な料理や味付けに合いますし、見た目によらず万能食材なんですよ？」

「あ、ああ。つまり、見た目も中身も良く知ると、結構味のある人だったと」

「ええ、そんな感じですよ！」

「……良く分かったよ」

小さく溜め息を吐いて無理やり納得してみせた聡だが、柏木姉弟から視線で無言の圧力をかけられ、更に清香に質問した。

「それで清香さん。先生を例えるとマスクメロンって言うのはどう

「いう事？」

「何となく似てるかな〜って思ってるので」

「……どこら辺がそうなのか聞いても良い？」

理解不能のまま思わず懐疑的な視線を向けてしまった事を聡は自覚していたが、清香はそれに気を悪くした様子を見せず、何かを思いつくような風情で話し始めた。

「あれは……、そうですね、私が幼稚園の頃の出来事なんですけど、当時住んでいた団地の側に昔からある商店街があって、いつもそこで買い物をしてたんです。そこに結構大きな八百屋さんがあって、大抵棚の上の方に5000円位のマスクメロンが果物の盛り合わせの籠とかと並べて、ドンと置かれてあつたんです」

「ああ、そういうのはお見舞い用とかお祝い用とかで、結構需要があるよね」

納得しながら口を挟んだ聡に、軽く頷きながら清香が話を続けた。
「当時は背が低かったから、普段上の方まで見なくて気がつかなかったのに、ある日何気なく顔を上げたらそれを見付けて、何だろうって凝視しちゃって」

「何だろうって、どうして？」

「私の中でメロンって言えば、いつもお母さんが買ってたプリンスメロンとかの表面がつるんとした物で、大きさも違うしそれがメロンってその頃認識できなかったんです」

「……なるほどね。それで？」

悪いことを聞いたかと微妙に視線を逸らしながら聡が続きを促すと、清香は淡々と状況を説明した。

「動かないでじっと見ていたら、顔見知りの八百屋のおじさんがどつかしたのかと聞いてきたから、あれは何かと尋ねたらメロンだよって教えてくれたんです。そうしたら私、腹を立てまして」

「え？ どうしてそこで怒るの？」

思わずと言った感じで真澄が口を挟んだ為、清香は今度は真澄の方に体を向けて説明を始めた。

「さっきも言いましたけど、それまでメロンと認識していた物にはあの独特の模様は無かったから、『あんなのメロンじゃない！気持ち悪い模様！』って思い切りけなしたんです。そしたらおじさんが笑って説明してくれて」

「どんな説明を？」

「『これはマスクメロンって言って、外の皮より中身が大きくなるのが早くて、中から押されて皮が裂けちゃうんだ。だけど中から出てきた汁がそこを塞いで、覆った瘡蓋がこの模様なんだよ？ だからこのメロンは自分が甘くなる為に一生懸命努力して、体全体痛い思いをして頑張った奴なんだ。それで変な模様が付いてるけど、その分とっても美味しいし、凄いな〜って皆が尊敬するから値段も高いんだよ』って。それを聞いて子供心に凄く感動して、一目惚れしたんです！」

「そ、そうだったの」

「一目惚れ、ねえ」

「……………」

所謂上流階級に生まれ育った面々は、マスクメロンなど見慣れた代物であり、そこまで感動を露わにする清香の気持ちがいまいち理解出来なかったが、適当に話を合わせた。

「それでその時、お母さんに『あれ買って！ 清香が美味しく食べさせてあげるの！』と言ったら、お母さんの顔が見事に引き攣って、『清香は子供だからまだ駄目なの！』って断言されて、無理矢理八百屋さんから引きずり出されちゃって……………」

（（（やっぱり庶民的な生活してたんだ。困っただろうな）））

突然店先で子供に「マスクメロンを買って」と言われて動揺したであろう当時の香澄に、3人は思わず同情した。

「それで商店街をズルズルと引きずられる様にして帰ったんですけど、どうしても諦めきれなくて、ちょうどアーケードの真ん中辺りで『マスクメロンさま〜！ 清香が大きくなったら食べてあげるから、待っててね〜！ 清香の事忘れないで〜』と涙声で叫んで、後からお母さんに滅茶苦茶怒られました」

そこまで言つて仏頂面になった清香だが、聞いていた3人は揃つて微妙に顔を歪めた。

「マスクメロン、さまっ……………」

「忘れないで、って……………」

「聞きようによつては、凄いい愛の告白……………」

そんな事をボソツと呟いてから、3人は申し合わせた様に爆笑した。

「い、嫌あああつ！ さ、清香ちゃん、笑わせないでええっ！！」

「酷い真澄さん！ 私にとつてはちよつと切ない思い出なのにつ！」

「この場合、値段が唯一2人の間に立ちはだかる高い壁だったんだね」

「今だつたら大丈夫だね。美味しく食べてあげられるよね？」

「うもう〜っ！ 浩一さんも聡さんもバカにしてええっ！ もう知らないっ！」

大笑いした為にすっかり拗ねてしまった清香を、何とか笑いを収めた3人が宥めた。

「ごめんなさい、悪かつたわ」

「いや、当時幼稚園児だし、可愛いエピソードだよ」

「うん、清香さんがマスクメロンに並々ならぬ思い入れがあるの分かったよ。だから同じように大好きな先生をそれに例えたの？」

その聡の問い掛けに、清香はちよつと考えてから反論した。

「確かに最上級で好きですけど、それだけで例えてる訳じゃないです」

「と云つて？」

「お兄ちゃんっていつも飄々としてるから、意志が強くて才能があつてすぐに何でも出来るスーパーマンみたいに思われがちですけど、実は結構繊細で不器用な所があるんです」

「そうなの？　あまり想像しにくいけど」

意外な表情を浮かべた聡に対し、思うところのあつた真澄と浩一は清香の話の行方を黙って見守つた。

「基本的にお兄ちゃんは凄い努力家なんですけど、それを隠すと言うか、あからさまにしたがらないタイプなんです。ああ見えて、実はある意味恥ずかしがり屋？　それにいつも穏やかに笑つてるイメージがありますけど、結構感情の起伏が激しくて、それを当たり障りのない笑顔で隠してる気がします。だから交遊関係はそれなりに広いけど、本当の意味で心を許してるって人は、ほんの一握りじゃないかと。……あ、浩一さんは勿論、その一握りの筈ですよ？」

「それは光栄だね。ありがとう」

取り成す様に付け加えられた言葉を聞いて、いつもは冷たく見える眼鏡の奥の目を優しく和ませた浩一が、嬉しそうに礼を述べた。それに小さく笑い返して清香が話を続ける。

「それで、いつ頃からか、どうしてそんな風に思う様になつたのかは分からないんですけど、お兄ちゃんって自分の苦しい事とか悲しい事とかは一切表に出さないで、しかも嫌な事に目を背けたりしないで真正面からぶつかった挙句、全部自分の中に抱えて最後には自分の力だけで昇華させてしまふとことん不器用なタイプなんじゃないかなって思つて。そういう心の痛みつてものが今のお兄ちゃんを形作つて、お兄ちゃんを魅力的に見せてると思うんです。だからその時聞いた、自分自身が傷つきながら自らを作つてるって聞いた網目模様の話とダブつて、ひよつとしたら似てるかなって思つて。うーん、これって身内の欲目かしら？　どう思います？　真澄さん」

そこで唐突に意見を求められた真澄は、些か呆然とした表情で口

を開いた。

「清香ちゃんって……、天然かと思ってたけど意外に鋭いのね……」
「いや、姉さん。この場合、天然だからストライクゾーンと真ん中を突いてくるんじゃないですか？」

「そうとも言えるかもね」

「どつという意味ですか？」

思わず小首を傾げた清香の頭を、真澄が軽く撫でながら穏やかに告げた。

「清人君の妹に清香ちゃんがいてくれて、本当に良かったって事。できるだけ一緒に居てあげてね？」

「勿論ですよ。あんまり私にかまけてお兄ちゃんが結婚できなかつたら、老後の面倒を見てあげるって約束しますから」

「あら、それなら彼の老後の心配はなさそうね」

思わずくすくす笑ってしまった真澄を、横から浩一が小声で窘める。

「姉さん、清香ちゃん。そろそろ主催者の挨拶が始まるから」

「あ、そうね。じゃあ話はまた後で」

「はい」

そうして会話は中断し、挨拶の後に上映が始まったが、聡は先程まで交わされていた会話の内容を暫く黙って頭の中で反芻していた。

それから無事映画は終了し、会場内の明かりが点くと共にざわめきが戻って来た。

「やっぱり榊原先生の作品は良いなあ、世界観が独特だし。映像化しても原作に沿ってしっかり人物描写も出来てたし」

「時代考証もしっかりしてたみたいね。ただテーマが家族愛っていう地味な物だから、売り出すのは難しいかもしれないけど」

「それはそうですね。派手な殺陣とかもないですし、大衆受けはしないかも」

「でもそれはそれで、最近では平凡な日常とか人生とかを深く掘り下げた作品が見直されてるから、こういう物も上映期間の後半になったら観客動員数が延びるかもしれないわよ？」

「そうですね」

女2人が上映された映画について好意的なやり取りをしていると、横から聡が声をかけた。

「清香さん、榊原先生がお帰りになるみたいだけど、もし会えたらサインをお願いしてみるとか言って無かった？」

そう言いながら聡が指差した前方を見て、1人の老人が今まさに席を立とうとしているのを認めた清香は、慌ててバッグを手に立ちあがった。

「本当だわ！ 聡さん、ごめんなさい！ ちょっと行ってきます！」
「焦らないで良いよ。ちゃんと待ってるから」

笑顔で言い聞かせ、自分も立ち上がりながら聡が出入り口に向かって駆け出す清香を見守っていると、横から今までとは打って変わった不機嫌そうな声がかげられた。

「小笠原さん、あなた清香ちゃん単なるツテで、本来の目的は貴方の母親とお兄さんを会わせる事よね？」

「……そうだと言ったら、どうなんです？」

本名で問いかけた事で明らかに嫌がらせと分かる口調に、清香がこの場に居ない為聡も些か挑戦的に返したが、それ以上に冷たい浩一の声が響いた。

「止めておけ」

「あなた方には関係ないかと思えますが？」

途端に睨み合う聡と浩一に、少ししてから真澄は疲れた様な溜息を吐いた。

「全く……。もう放っておきなさい、浩一。見ず知らずの間柄でも、

「一応忠告はしてあげたんだから」

「分かりました」

そう言いながらも納得はしていない顔つきで自分を睨みつけている浩一を、聡も負けじと睨みかえしていたが、ここで明るい声が割り込んだ。

「聡さんっ！ 榊原先生から首尾良くサインを貰えたの、ほら！」

「あ、ああ、良かったね、清香さん」

自分の背後から駆け寄って来た清香に、慌てて険しい表情を戻しながら振り向くと、満面の笑みを浮かべた清香が手にした本を差し出し、表紙を捲って流れる様に書かれたサインを示して見せた。

「うん、もっと気難しい人かと思ってたのに、『貴方の様なお嬢さんに読んで貰っているとは嬉しい限りですね』って快くサインして貰えて！ 聡さんにここに連れて来て貰ったお陰だわ。本当にありがとうございます！」

心の底から喜んでいるのが分かる笑顔に、聡は胸の中に溜まっていた色々な物が、すっかり消え去った様な錯覚を覚えた。少しでもそんな穏やかな心地を味わいながら、自然な動きで片手を伸ばす。

「そこまで喜んで貰って嬉しいな。できればお礼してくれると、俺も嬉しい」

「お礼ですか？ 私にできる事だったら何でもしますよ？」

「じゃあちよつと触らせて」

「はい？」

「え？ ちよつと！」

「何をやる気だ！」

さり気なく聡が口にした内容に真澄と浩一が慌てて事の真意を確かめようとしたが、それには構わず聡は清香の頭を撫で始めた。

「えっと……、聡さん。そんなに私の頭が撫でたかったですか？」

「うん、そうだね。本音を言えば初めて会った時に言った様に、そ

のポニーテールを引つ張つてみたいけど我慢するから」

当惑して尋ねる清香に、聡が些か残念そうに本音を告げたが、それを聞いた清香は少しの間だけ考え込み、クルツと後ろを向いて聡に背中を向けた。

「うーん、この際、ちょっとだけなら引つ張つてみても良いですよ？」

「本当に？　じゃあ遠慮なく」

そう言いながらも実際には引つ張ったりはせず、髪の毛の束に指を通してサラサラとした手触りを堪能している聡を見て、真澄達は顔を顰めつつ囁き合った。

「外見と違って良い度胸してるわね、こいつ。すっかり私達の事忘れて無い？」

「この場に清人が居なくて正解だった。これを見たら問答無用で殴りかかる」

そうして下手するとバカップルに見えかねない行為を止めさせる為、真澄は2人の間に容赦なく割り込んだ。

「さあ、食事にいきましょ！　今夜は私が奢つてあげるから。大人しく付いていらつしやい」

「え？　真澄さん。それは流石に悪いし、これから聡さんと」

「柏木さん、俺はそれほど親しいわけではありませんので、遠慮させて頂き」

「四の五の言わないで付いてきなさい。この中で一番稼いでる人間が奢るのが当然でしょ？　それとも何か？　私の奢りじゃ食べられない理由でも？」

清香と聡が固辞しようとする台詞を遮り、真澄が半ば脅しをかけると、横から苦笑しながら浩一が言葉を添えた。

「悪いね。姉は言い出したらきかない性格だから、付き合ってくれ

ると嬉しいな」

そこまで言われて清香と聡は苦笑いの表情を浮かべた顔を見交わした。

「それじゃあお言葉に甘えて」

「ご馳走になります」

「最初から素直にそう言えば良いのよ。じゃあタクシーを拾うわよ！」

そう高らかに宣言して率先して歩き出した真澄の後ろに付いて、3人は諦めた様な苦笑を浮かべつつホールの外へ出て行ったのだった。

第10話 反発と後悔と

休み明けで何となく仕事の効率が悪い月曜日の午前中。自分の仕事に一区切り付けた聡は、席を立って壁際のコーヒーマーカーが置かれていた場所へと足を向けた。

各自好きな時に飲める様に、出入りの業者がコーヒート共に常に過不足無く備え付けているカップにコーヒートを注ぎ、その場でブラツク飲みつつ一息入れていると、背後から明るく声がかけられる。

「よう、角谷。先週招待券を渡した例の試写会、どうだった？」

（そう言えばこいつはほぼ一週間出張だったか）と思い出し、出社早々自分と顔を合わせる事なく、上司や関連部署への報告を済ませ、漸く自分の部署に戻って来たらしい同期の高橋に、聡は礼を言いながら手にしたカップを軽く持ち上げて尋ねた。

「ああ、譲ってくれてありがとう。連れも喜んでくれたしな。ところで飲むか？」

「サンキュ、頼む。砂糖入りで」

「了解」

すかさず注文を付けてきた高橋に気を悪くする事なく、聡は軽く笑いながら手早くコーヒートを新しいカップに注ぎ、砂糖を入れてかき混ぜる。そして完成したそれを相手に手渡ししながら、思い出した様に苦笑混じりに付け加えた。

「そう言えば、『譲ってくれた会社の人にお礼を言っておいて欲しい』と言われてたのに忘れてた。朝一番で言わなくて悪いな」

「そんな事気にするなよ。生真面目な奴だな、将来禿げるぜ？」

「それは避けたいな」

「それはそれとして……、やっぱり女と行ったんだな。男とは有り得ないと思ってたが」

途端にニヤニヤ笑いを隠さずに突っ込んできた高橋に、聡は小さ

く溜め息を吐いてから、微妙に視線を逸らしつつ答えた。

「……誤解しないでくれ。彼女はただの知り合いだから」
勿論それで納得する高橋では無く、わざとらしく目を見開く。

「単なる知り合い？ それでお前がわざわざ趣味でない作品の試写会の招待券を目にするやいなや『譲ってくれ』と懇願するわけか？
お前、経理部の美里ちゃんとか人事部の真紀ちゃんとか情報統括本部の陽菜ちゃんとかと付き合ってた時に、わざわざそんな事したことないだろ？」

「だから……、清香さんはそんなんじゃないって。第一彼女達なら間違ってもあの手の映画は見ないし」

「へえ、さやかちゃんって言うんだ。可愛い名前だな。どんな字を書くんだ？」

「……………」
弁解の台詞が却って相手の興味を引く結果になった上、入社以来の社内での女性遍歴まで口にされた聡は、憮然としてコーヒを一口啜った。それをチラリと横目で見ながら、高橋が微かに苦笑しつつ容赦のない指摘をしてくる。

「お前、『来る者拒まず去る者は追わず』とはちょっと違うが、基本的に女のご機嫌を取ったりしないタイプだから、長続きしないんだぞ？ 皆良い子ばかりなのに入社三年目で3人と付き合ってたって、男としてどうかと思うが」

最後はしみじみと語った高橋に、聡が些かムツとしながら言い返す。

「言うておくが二股をかけたりはしてないぞ？ それにどうしてそんな卑屈になって、付き合ってる女の機嫌を取らなきゃならないんだ？」

「そりゃまあ、卑屈になるほどする事は無いと思うが、お前は逆に気を遣わなさ過ぎ」

「そうか？ 自分ではそうは思っていないが」
淡々と自分の考えを述べた聡に、今度は高橋が溜め息を吐いてから口を開く。

「お前さ……、実は身内に超フェミニストの男が居て、それへの反発心から付き合ってる女には無意識のうちに『黙って俺に付いて来い』的なオーラを発してるんじゃないのか？ そんなの今時流行らないと思うが」

「何だそれは……」

予想外の内容を聞かされた聡は思わず脱力しかけたが、高橋は真顔で続けた。

「うん、そう考えると単なる知り合いの清香ちゃん、女への気の遣い方に関してリハビリするのも良いかもな」

「だから、リハビリって何だ」

「ところで知り合いつてどんな知り合いだ？ 仕事関係じゃ無いよな」

自分の話を聞かずに一方的に断定してくる高橋に、色々諦めた聡は多少自棄気味にそれに答えた。

「図書館で知り合った二十歳の女子大生。偶々あの映画の原作者のファンだって知ってたから、券を融通して貰ったんだよ」

「お！？ 五歳下の女子大生とはやるな、角谷。それで？ 映画の後機嫌の良い彼女を、どこぞに連れ込んだとか？」

「するかっ！！ 第一、会場で出くわした彼女の知り合いに、俺が逆に拉致されたぞ」

「はあ？ 何だそれ」

嬉々として食い付いてきた高橋を仕事中の周囲を憚りながら小声で叱責すると、案の定怪訝な顔をされた。勢いで口を滑らせてしまった事を後悔しつつ、聡は適当に誤魔化すのを完全に諦めた。

「柏木物産企画推進部第二課長の柏木真澄と、その弟の営業部第一課長の柏木浩一と遭遇したんだ。彼女がその2人と家族ぐるみで親交があつて、両者とも清香さんを妹みたいに可愛がつてるらしい。映画の後、彼女共々無理矢理食事を付き合わされる羽目に」

「げっ！ あの長男の弟を押し退けて踏み付けて、名実共に柏木産業次期後継者レーヌ筆頭と言われてる、あの《柏木の氷姫》に可愛がられてる女あ！？」

（何か微妙に浩一氏が気の毒になつて来たな。確かに姉の方がインパクトは強烈だが）

自分の話の途中で突然呻いて指を差してきた高橋に、聡は無意識に眉を寄せた。そんな聡の内心など分からない高橋が、慌てて尋ねてくる。

「おい、ちよつと待て。さつき食事を付き合わされたとか言つたか」

「ああ。『私の奢りだと食べられないとか言わないわよね？』とか半ば脅迫されて。浩一氏は終始申し訳無さそうにしたが。その後カラオケにも連れて行かれて、門限が21時の彼女の携帯にお兄さんから電話がかかってきたら、名乗りもせずに出て『私が後から送り届けるわよ。黙つてお座りして待つてなさい！』と問答無用でブチ切つてた。そう言えば……、その後かかって来なかつたな」

（やつぱり兄さんもあの猛女には適わないらしい）と妙な親近感を感じながら苦笑混じりにその夜の事を思い返していると、高橋が頭を抱えて呻いた。

「あの”柏木真澄の妹分に言い寄つてるだけじゃなく、おそらく超ゴージャスな食事を奢つて貰つた挙げ句、仲良くつるんでカラオケに行つただと？」

「いや、言い寄つてはいないし、奢られたのは不可抗力で、つるんでなんて表現は以ての外なんだが」

そこでいきなり棚の上にカップを置いた高橋は、空いた両手で聡

の肩を掴み、真剣な表情で睨み付けてきた。

「ぐだぐだ言うな角谷！ 悪い事は言わん、今すぐその清香ちゃんとはすつきりきっぱり別れる！」

「藪から棒にいきなり何だ？」

「その清香ちゃんと付き合ってるのがバレたら、お前、最悪仕事干されるぞ？」

「おい、高橋落ち着け。だからどうしてそうなる」

呆れた様に見返す聡に、高橋はゴクリと唾を飲み込んでから声を低めて話し出した。

「課長、去年数社参加したプレゼンで柏木物産に負けたんだ。覚えてないか？ 当時日本未進出だったドイツの《Freiheit》の商品を、某系列百貨店とタイアップして全国展開させようって案件」

「あつたな、そう言えば。……まさか、その時の向こうの担当者が」

思い当たった内容に聡が軽く驚きを示すと、高橋は重々しく頷いた。

「ああ、泣く子も黙る柏木女史だった。その時、俺も担当者の一員だったから課長と係長に同行したんだが、提案内容もさることながら実に威風堂々としていたな。最後に会場を後にする時、わざわざ向こうからこちらに挨拶しに来たんだ」

「何て？」

「『小笠原産業の提示した内容もなかなかでしたわ。よほど《Freiheit》の商品に愛着を感じていらしたんですね。ご安心下さい。我が社が御社の分まで日本全国で商品の魅力を十分に知らしめて、思う存分売り上げて見せますわ』って上から目線で、実際見下ろされながら。実際に言われなかったが、背後から高笑いが聞こえてきそうなオーラを醸し出してた……」

「あの人、女性にしては上背があるからな……」

（そして課長は男性にしたら背が低いからな）

ハイヒールを履くと180cmの自分とさほど目線が変わらない

真澄の姿を思い返した聡は、当時の上司の心境を思つて少し切なくなつた。しかしそんな感傷を打ち消す様に、高橋が話を続ける。

「なあ、嫌味だろ？ 仕事奪つた上、そこまで追い討ちかけなくても良いだろ？ 鬼だよな。その晩居酒屋で係長と一緒に課長に散々愚痴られてさ。酷え目にあつた」

「……お疲れ」

切々と訴える相手を一応労つた聡だが、ここで漸く高橋が話を戻した。

「だから！ 坊主憎けりや袈裟まで憎いつて言葉もあるし、その柏木女史と懇意の女の子と付き合つてるなんて事が課長にバレたら、絶対お前目の敵にされるつて！」

「それとこれとは関係無いだろう。それに付き合つたりはしていないと、何度言えば分かるんだ？」

（第一、そんな事をしたら、飛ばされたり干されたりするのは向こうだし……）

呆れつつも、どちらにしても自分の立場からすると少々困つた事になりそうだと考えていると、高橋が慌てた様に動き出した。

「うわ、やべ。課長が睨んでる。俺行くわ」

「ああ、無駄話をし過ぎだな。俺もそろそろ机に戻る」

聡も険しさを含んだ上司の視線を察知し、2人はカップの中身を一気に飲み干し、横に設置されているゴミ箱に空のカップを突っ込んで業務へと戻って行つた。

その日の夜、病院の面会時間ギリギリに聡が母親の病室を訪れると、電動式のベッドの半分を持ち上げた状態で由紀子がそこに上半身を預け、静かに本を読んでいた。

「あら、聡。来てくれたの？」

自分の姿を見付けて嬉しそうに笑いかけてくる由紀子に、聡も照れ笑いで応じる。

「今日は何とか消灯前に来れたね。いつもバタバタしてごめん。土日とかにゆっくり来れば良いんだけど、色々あって」

「良いのよ？ もういい大人なんだし。良い加減母親より彼女を優先にしないと、振られてしまうわよ？ えっと……、何てお名前だったかしら、三宅さん？」

笑って確認を入れてきた由紀子に、聡は幾分気まずそうに視線を逸らした。

「……彼女とは、もう別れたから」

「あ、そうだったの？ ごめんなさい、知らなくて」

「いいよ。俺もわざわざ言わないし」

しかも最後ではなく二代前の彼女の名前を口にされた事で、聡は（俺ってそんなに彼女の入替わりが早かったらどうか）と微妙に反省した。そして多少気まずくなってしまった室内の雰囲気を一掃しようと、ここで聡が持参した物を鞆から取り出す。

「母さん、今日はこれを持って来たんだ」

「これって、私の本よね。どうしてわざわざ本棚から持って来たの？」

見覚えの有りすぎる手製のカバーをかけられたそれを受け取った由紀子が不思議そうに見返すと、聡は表紙を捲って見せた。

「母さんが喜ぶかと思つて、東野薫先生のサインを貰ってきた」

『喜ぶかと』と口にした割には些か心配そうに告げた息子に、由紀子の目が驚きで軽く見開かれ、サインと聡の顔を何回か交互に見てから、喘ぐ様に囁いた。

「貰った……、つて、聡？ あなた、まさか……、本人に直接名乗つて、サインして貰ったわけじゃ……」

由紀子の顔色は白を通り越してもはや蒼白になっており、その反応をある程度予測していた聡は、冷静に宥めにかかった。

「勿論、面と向かって『俺はあなたの弟です、宜しく』なんてやってないから。兄さんの妹の清香さんって子と最近知り合って、俺と兄さんの関係は明かさなまま、その子経由で頼んだんだ。角谷って名乗ったし、心配要らないよ」

（名乗ったけど兄さんにはバレバレだったみたいだが）

余計な事は自分の胸の中だけにしまつて説明した聡だが、それを聞いた由紀子が何かを思い出そうとする様に、前方の壁の一点を見やりながら呟く。

「清香さん……。そう言えばあの時、側にかなり年下のお嬢さんが制服を着て座って居たような……。あの子かしら？」

「あの時って……。母さん。ひょっとして彼女と面識があったの？
初耳だけど」

「……。いえ、そんな事は無いわ。言いか間違っただけよ」

驚いて確認を入れた聡だが、それで瞬時に我に返った由紀子は誤魔化し、それ以上は余計な事を口にせず黙り込む。何分かそんな沈黙が続いたが、開いたページに目を落とし、そこに書かれたサインを愛おしそうに手で軽くなぞっていた由紀子が漸くそこから顔を上げ、聡の顔を見据えながらゆっくりと口を開いた。

「聡？ 嬉しいけど、こんな事はもう止めてね？ 相手を怒らせるだけだから」

「怒っていたらサインなんかしてくれないと思うけど？」

「それはこちらが身元をきちんと告げなかったからよ。第一、清香さんにも迷惑だろうし」

「彼女に母さんが兄さんの作品を愛読してる事を話して聞かせたら、凄く喜んでくれて快諾してくれたけど？」

「余計な事はしないでって言ってるの！ 人の気も知らないで、自分の自己満足の為に他人を騙して平気にいるなんて、人として最低

でしょう！ 黙って親の言う事を聞きなさい！！」

いきなり由紀子が声を荒げながら叱責してきた為、常には有り得ないその光景に聡は驚いて固まったが、次に激しい怒りに駆られた。

「……へえ、母さんは余計な事だつて言うんだ」

「当たり前でしょう？ 先方とこちらとは、今ではもう無関係なんだから！」

「じゃあ発作で倒れて意識が朦朧とした時、兄さんの名前を何度も口にしたのは？ 父さんは勿論、俺の名前だつて一度も出なかつたけどね」

「……え？」

そこで由紀子の声に勢いが無くなり、逆に静かに語り掛けた聡の口調が、段々激しいものに変化していく。

「ああ、確かにそうだね。兄さんと俺達は無関係だ。現に五年前に父さんから話を聞いた時、だから母さんが東野薫の本を読んでもんだと納得したけど、本当にそれだけだつたし。母さんが倒れるまで、正直存在すら忘れてたさ！」

「聡、ごめんなさい。さつきは私が言い過ぎたわ」

慌てて謝つてその場を治めようとした母親の台詞を、聡は聞かぬふりで続けた。

「だけど母さんはずっと忘れて無かつたつて事だろ？ そりゃあそつだよな。何と言つても家付き娘の母さんが、本気で好きになつて駆け落ち同然に結婚した相手との間の子供だし。そりゃあ可愛いだろうさ！ あの頑固爺に押し付けられた再婚相手の、あの面白味の無い父さんの子供の俺なんか、二の次だろうし！」

「聡！ そんな事は無いわ！」

血相を変えて激しく由紀子が否定したが、それを見て逆に落ち着いた聡は、いつそ冷たいとも言える口調で淡々と続けた。

「何を今更……。あれではつきり分かったから、別に遠慮しなくて良いさ。正直に言ったら？ 俺は兄さんの代わりだって」

「聡。だからそれは誤解よ。私は別に清人とあなたを比べたりなんかしてないわ」

必死で弁解する由紀子を真正面から見据えながら、母親が初めて“清人”と兄の名前を読んだ事実には訳も無く苛ついた聡は、以前からの疑問を母親にぶつけた。

「未だに気持ちを残してるなら、佐竹さんと別れた時、どうして兄さんを引き取らなかつたんだ？ 佐竹さんは再婚するまで10年近く男手1つで兄さんを育てていて大変だったろうし、うちは昔から金だけは十分過ぎる程あるんだから。母さんが言えばあのジジイだって、いけ好かない男の子供でも兄さんを手元に引き取ったんじゃないか？」

言うだけ言った聡は母親の反応を慎重に窺ったが、由紀子は聡から視線を逸らして俯いたまま、ボソツと呟いたのみだった。

「……………あなたには関係の無い事よ」

「分かった。もういい、俺は帰る。おやすみ」

何となく母親に裏切られた気持ちで一杯になってしまった聡は衝動的に立ち上がり、吐き捨てる様に別れの言葉を口にしながら由紀子の顔を見ずに足早に病室を去った。

廊下に出た瞬間、幾らか頭が冷えて残してきた母親の事が気になったが、どうしても病室内に戻る気にはならず、苛々しながらそのまま歩き出す。ちょうどその病棟で待機していたエレベーターに乗り込み、一階フロアに降りて廊下に足を踏み出した直後、我慢できなくなつて廊下の壁を拳で力一杯叩いた。

「くそっ……………」

考え無しに殴った拳も痛かったが、これまで穏やかな性格の由紀子に怒鳴ったり嫌味を言った事など皆無だった聡はそれ以上に胸の

痛みを覚え、そんな自分自身の感情を持て余していた。

第11話 親友の裏事情

一時限目の開始までに余裕を持って目指す教室に着いた清香は、既に机に座っていた親友の朋美に声をかけ、その隣に座った。そこで必要な物をショルダーバッグから取り出し、机の上に並べ終わった清香が、突然何を思ったか俯いたまま不気味な笑い声を上げる。

「うっふふふふ」

「……ちよつと清香。何よ、その変な笑いは」

さすがに隣席に辛うじて聞こえる程度の押し殺した笑い声だったが、現にそこに座っている朋美が薄気味悪そうな視線を向ける。すると清香が如何にも嬉しそうにバッグから一冊の本を引っ張り出し、朋美に向かって掲げて見せた。

「これっ！ 今日の講義は午後1コマ空くから、その時間にじっくり読み返そうと思って持って来たの！」

もう頬擦りせんばかりの上機嫌で告げる清香に、朋美は些か呆れた様に言い返した。

「ああ……、この前聞いた、試写会場で榊原康孝本人に直に会って、サインして貰ったってやつね。あんたもつくづく渋い趣味してるわ」「ほつといて。……うん、だけど何か、最近運氣が増してる気がするわ。聡さんに会ったお陰かな？ 招待券も貰ったし」

ウキウキと誰に言うとも無く呟いた清香だが、それを耳にした朋美はピクリと反応した。

「ところで清香」

「なあに？」

「その聡さんとやらの事は、お兄さんも知ってるのよね？」

慎重に問い掛けた朋美に、清香は無邪気に答える。

「勿論よ。同窓生だし、今時珍しい親孝行だねとか色々誉めてたわ

よ？」

「ふうん、“誉めて”ねえ……」

（あんたの前で本心から他の男を誉めるわけ無いじゃないの！）

清香とは高校時代からの付き合いの為、既に清人の性格を看破してしまっている朋美は心の中で断言し、今後の方針について1人考えを巡らせた。

（さて、このパターンは初めてなのよね。今まで清香に纏わりついてくるのは学生だったから、いつも私から情報発信してたし……）

本人は全く知らない事ながら、清人は清香と仲の良い朋美を《清香に纏わりつく男の情報提供及び工作活動要員》として目を付け、幾らかの交渉を経て双方合意に至った協力関係にあった。

既に五年目に突入するこの関係の為、今では朋美の周囲で清香に言い寄る男がほぼ皆無であり、その事に対して朋美は多少親友に罪悪感を抱いていた。それで一瞬（あのシスコン兄貴が認めている男なら、清香の恋を応援してあげられるかも）とは思ったものの、（その可能性はあり得ない……）と自分自身でそれを否定したのだった。

初めて聡の名前を清香から聞かされてから、注意深くその人となりなどを尋ねたりしていたのだが、清人の方からその人物について何も言っつてこないと言うのが、朋美にしてみれば不気味と言えば不気味だった。

（聞いている感じでは、まだ好きとか意識してるわけじゃ無さそうなのよね。それに社会人だから学内で接触する事はまず有り得ないし、私が知っていなくても良いって事かしら？）

そんな考えを巡らせながら、朋美は相変わらず本を抱えて楽しそうに語る清香に大して、適当に相槌を打ちながら笑顔を見せていた。

そんな状況が一変したのはその日最後の講義が終わり、2人で帰り支度をしていた時だった。講義中電源を落としていた携帯の電源を立ち上げ、メールチェックをしていた清香が突然当惑した声を上げた。

「……え？ 聡さん？ 嘘、やだ、後五分位しか無い。どうしよう」
急に携帯を握り締めながらオロオロし始めた清香に、朋美は冷静に声をかける。

「ちよつと落ち着きなさい。例の聡さんがどうかしたの？」

「それが……、聡さんには私がこの学生なのは話してあったんだけど、今日は午後から営業の仕事でこの近くに来ていたみたいで、『ちよつと顔が見たいのと話したい事があるから、迷惑で無ければ正門の所で待つてる』って。それで到着予定時刻まで五分切つててそれを聞いた朋美は素っ頓狂な声を上げた。

「はああ！？ 清香、あんた別に約束なんかしてないのよね？」

「うん、してないけど」

「それなら『用事があるので失礼します』って断れば良いだけの話でしょ？ とつとと西門から帰るわよ！」

「でも朋美、わざわざ聡さんが仕事の途中で立ち寄るなんて、何か大切な話かもしれないし」

「大手総合商社のバリバリエリートサラリーマンが、一介の学生相手にどんな大切な話があるって言うのよ！」

教室内の級友達の怪訝そうな視線を一身に浴びながら、朝の心境とは打って変わって朋美は内心で焦りまくっていた。

（まずいわっ！ 校内で清香に男が近付くのを黙認なんかしたら、私の入学金がっ！）

朋美が高三の夏、実家が自身の進学費用を用立てるのはかなりギリギリだろうと判断していた朋美は、レベルを上げて地方国立大学を受験して1人暮らしの生活費を何とか工面するか、余裕で入学で

きる自宅から通学可能な私立のここにするかの二者択一を迫られていた。そして考えた挙げ句、清香が同じくここを志望校にしていた事から、高一の時から清香の周囲の男どもの情報を横流しする度に、惜しげもなく過分な“お小遣い”をくれていた清人との直談判に及んだのだ。

「すみません、入学金を全額無利子12年返済の条件で貸して下さい。その代わり大学内で清香には一切男を近付けさせません！」

その申し出を聞いた清人は如何にも楽しそうに笑い、幾つかの条件を出した。

《清香に気付かれると不味いので、男との多少の接触は許容範囲とする。その代わり2人きりにはさせない》

《卒業まで虫除けができたら、貸した全額は返却しなくて構わない》
《もし失敗したら全額返済、当然銀行金利程度の利子はつけて貰う》

その条件で清人と手を結んだ朋美としては、かなり切実な問題だった。

（この不景気な時代に、卒業したって稼ぎの良い職にありつけるかどうかなんて分からないわ。百万単位のお金がチャラになるなら、悪魔にだって魂だろうが何だろうが売ってやるんだからねっ！）

そう決意を新たにしながら、未だに某財団から奨学金を貸与されたと本気で信じている両親に対しても腹を立てた。

（大体、保護者に書類の一枚も見せない書かせないでポンとお金を渡すなんてあり得ないでしょ？ それを疑いもしないなんて、そんな事だから出世コースから弾かれてうだつが上がらないのよ！ もう頼りにできるのは自分自身だけだわ！）

頭の中で脳天気な親への八つ当たりも済ませて気持ちを落ち着けた朋美は、素早く頭を回転させながら清香に声をかけた。

「ねえ、清香。この場合、わざわざ相手に付き合う義理は無いと思

うんだけど、清香としては取り敢えず話を聞きたいのね？」

「うん。わざわざここに立ち寄るなんて始めてだし、電話じゃ出来ない話なのかと思うと気になるし」

「じゃあ取り敢えず門まで行きましよう。案外すぐ済む話かもしれないわよ？ 私も付き合うから」

「ありがとう、そうしてくれる？」

「私は構わないわ」

鷹揚に頷いて見せた朋美だが、実は（変に引き止めてムキになられたり、あの時の代わりにとか変な交換条件にされたら面倒だもの。この際徹底的に観察させて貰うわ）などという思惑の結果だった。

そんな風に話が纏まり、何やら朋美が携帯を操作してから2人連れ立って校舎から正門への真っ直ぐな道を歩いて行くと、門柱の側に佇む1人の男性の姿が目に入ってきた。

「ねえ、清香。もしかしてあの人？」

「うん、あの人が小笠原聡さんよ」

「……へえ」

相手も歩いてくる清香を認めたらしく、鞆を持っていない方の手を軽く振りつつ、笑顔で真っ直ぐ2人の方に向かってくる。校内では見掛ける事の少ないビジネスマンの出で立ちの彼と、それに近付いていく自分達に周囲の視線が集中していくのが分かったが、朋美はそれには構わず徐々に近付いてくる聡を食い入る様に眺めた。

（清人さんとはまた毛色が違ったイケメンだわ。体つきも均整取れている感じだし、着ている物も上物そう。だけど……、どこことなく温室育ちって感じが。あの清人さんに真正面から刃向かえるだけの根性が有るかしら？）

そんな結構失礼な事を考えている間に、両者は1メートル未満の距離まで接近した。

「こんにちは、清香さん。突然メールして学校まで押し掛けてごめんね？」

「いえ、ちょうど今日の講義は全部終わった所でした」

「それは良かった。それでちょっと時間を貰いたいんだけど」

「お話中すみません。清香、こちらの人に私を紹介してくれないの？」

自分の目の前で2人が和やかに話し出したところで、朋美が些か強引に会話に割って入った。それを受けて清香が慌てた様に友人を紹介する。

「あ、ごめんね、朋美。……聡さん、こちらは高校時代からの友人で緒方朋美さんです。クラスも一緒に、2人で帰るところだったんです」

「小笠原さんの噂は、清香から色々お聞きしています。初めまして」
につこりと笑って清香が親友を紹介すると、今度は聡が愛想笑いを浮かべつつ、目の前の女性の観察を始めた。

「こちらこそ初めまして。知って頂いていて光栄です、宜しく。だけど高校から一緒にいて長いし、もう親友って域だよな」

「そうですね。若干腐れ縁っぽいですけど」

「酷いわ、朋美」

「そうなるか……、当然彼女のお兄さんともお知り合いかな？」

「ええ、良く存じてます。色々清香の事について相談を受けたりもしています」

（やっぱり裏で兄さんと繋がってるか……。彼女の親友面して、陰で何をしてるか分からないな）

含みのある会話を交わし、互いに相手の言わんとする所を察した2人は、愛想笑いを更に深くした。

「ところで、小笠原さんは清香にお話があるとか」

「ああ、ちょっとね」

「お時間かかりますか？実はこの後、私達用事がありまして」

「え？ 特に何も無いよね、朋美」

キョトンとして問い掛けてきた清香に、朋美は幾分すまなそうに、しかし余裕で言い返した。

「ごめん、今思い出したの。今度の学祭でのチャリティーオークションに、スタッフでの参加を頼まれてたでしょう？ その打ち合わせが後40分位で始まるのよ」

「ええ？ 聞いてないそんな話！」

「だからごめんって」

当惑した声を上げた清香に朋美は詫びを入れ、改めて聡に向き直った。

「そういう訳なので小笠原さん、清香と話をされても構わないんですが、外に出てどこかお店に入つてとなると、それに間に合わなくなる可能性があるんです。宜しかったらあそこの学食でお話ししませんか？今の時間はカウンターは開いてませんが、自販機は揃っていますし」

そう言いながら朋美は前庭に面したガラス張りの学食を指差した。本校舎から渡り廊下で連結されているそれは上層階に図書館や研究室を抱えており、チラホラと調べものや研究に一区切り付けて、一息入りに降りてきたらしい人間の姿も見える。それを無言で眺めてから聡は快諾した。

「俺は構わないよ。君達の都合も聞かずに押し掛けたのはこちらだし。せつかくだから2人に奢るよ。何が良い？」

「それならカフェオレをお願いします」

「分かった。清香さんは？」

そんな事を言いながらさっさと学食に向かって歩き出した聡と朋美を、一歩遅れて清香が追い掛けた。

「え？ 朋美も一緒に居るの？」

「何か都合が悪い？」

「俺との話が終わったら一緒に打ち合わせに行くんだろ？ 一旦離れてまた呼び出しとかするのは面倒だろうしね。俺は構わないし」「そうですよね。一人前の社会人が、人に聞かれちゃマズい話なんかしないですよね」

「そうだね。相手の都合を聞かずに押し掛ける程度の非常識な事位はするかもしれないけど」

「あら、自覚はありましたね。良かったです」

（どうあっても彼女と2人きりにはしないつもりだな？ この女）
（ふっ……、1分で打ち合わせ前倒しの根回しは完了よ。意地でも清香は離さないわ！）

笑顔と友好的な口調を取り繕いながら聡は朋美と嫌味の応酬をし、微妙な顔をしながらも清香ははつきりとそれを認識できないまま学食へと入って行った。そして聡の支払いでそれぞれ好みの飲み物を手に入れた3人は閑散としている学食の片隅のテーブルに落ち着き、聡が幾分迷う様な素振りを見せてから、自分のコーヒーを入れた紙コップに口をつけないままゆっくりと口を開いた。

「清香さん。呆れないで聞いて欲しいんだけど」

「はい、何ですか？」

一口レモンティーを口に含んでから問い返した清香に、聡が予想外の事を言い出した。

「実は……、三日前に母と喧嘩をしたんだ」

「「はい？」」

もの凄く深刻そうな顔で語られた内容に、清香と朋美は揃って戸惑った声を上げた。それには構わず、聡が紙コップの中身を見下ろしながら淡々と続ける。

「あまり詳しい事は言えないけど……、母に良かれと思った事が、

実は本人にとってそうでは無かったみたいで。あ、いや、少しは反発みたいな物があるかもしれないとは予想してはいたんだけど、初めて母から大声で叱責されて動揺したと言うか、ついこっちも口を滑らせて売り言葉に買い言葉で結構酷い事を……」

段々ボソボソとした口調になってくる聡の話清香は啞然として聞いていたが、恐る恐る尋ねてみた。

「あの、聡さん。喧嘩の内容が全然分からないので判断出来ないんですが、客観的に見たら悪いのは聡さんですか？ それともお母さんですか？」

「……殆ど俺が悪いと思う」

がっくりとうなだれてしまった聡を、清香は励ます様に続けた。

「それがちゃんと分かっているなら、一刻も早くお母さんに謝った方が良いですよ？」

「次の日謝りに行ったんだ。そしたら『気にしてないから』と言われたけど、母の態度がきこちなくて。でもそれ以上どうしたら良いのか分からなくて。しかも当日俺が飛び出した後、母が体調を崩してナースコールで看護師を呼んだって主治医から聞いて」

「え？ お母さん、どうかされたんですか？」

驚いて聡の話の腰を折ってしまった清香だが、聡は力無く笑って続けた。

「狭心症の発作で入院してて予後は良かったんだけど、興奮させたのが不味かったのか血圧の上昇と不整脈が出て、予定してた退院日を半月は延ばして経過を見る事になったんだ。11月末に退院予定だったのが、年内退院が微妙になった」

「そうだったんですか」

どう言葉をかけて良いか分からなくなってしまったらしい清香の表情を窺いながら、聡は1人自己嫌悪に陥った。

（俺は一体何をやってるんだ？ 全く無関係とは言えないが、彼女

にこんな愚痴を聞かせた挙げ句、自分の母親の事にまで気を遣わせる結果になって。情けないにも程があるだろう……）

そうして小さく溜息を吐いた聡は、深刻そうな顔の清香をチラリと見ながらしみじみとここに来た理由を告げた。

「その他にも色々あって、この2日間どうしても気分が晴れなくて、清香さんの顔が見たいなと切実に思」

「馬っ鹿じゃないの？」

そこで朋美が聡の独白を容赦なくぶった切り、舌戦の火蓋が切つて落とされたのだった。

第11話 親友の裏事情（後書き）

長くなりすぎてここで一度切る事にしました。続きは今日中に纏めて明日更新予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9168w/>

心の隙間の埋め方

2011年10月13日13時49分発行